翻訳

ニコス・カザンザキス (1999) 『ロシア文学史』アテネ*

Καζαντζάκης, Νίκος (1999) *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας*, Αθήνα.

福田　耕佑　FUKUDA, Kosuke
京都大学大学院文学研究科博士課程

訳者による序文

本稿は，現代ギリシア文学史を代表する作家であるニコス・カザンザキスによる Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας の序章から三章までの日本語訳である。カザンザキスとロシアの関わりに関して述べれば, 彼はソヴィエト政府によって 1927 年に革命十周年記念祭に招待され, その後 1928 年にはヴラヂウァストクを目的地としたシベリア旅行を敢行している。これらの経験は後にフランス語で書かれた小説『トダ・ラバ』に反映されることになる。本書『ロシア文学史』はロシアを離れた後 1930 年の前半に執筆された (Janiaud-Lust 1970: 309) 。カザンザキスはロシア文学から多くの影響を受けたが (Φιλιππίδης 2017: 143-180) ，特に本書の序章より明らかなように，第二次世界大戦期以降の主要なテーマともなっていく,「民衆への視点」と「民族に根を下ろす」という二つの観点が早くも表れている（福田 2017: 108-109; 117-118)。今日に至るまでこの『ロシア文学史』に関しては、その翻訳が出版されたことが無いばかりか，先行研究での言及も見られない。先述のように，本書の序章，及び民俗学的視点とロシア中世史を接合させようとした一章から三章は，カザンザキス文学研究にとって重要であるばかりでなく，ギリシア文学研究の枠を超えロシア文学研究にとってもまた，ロシア文学が外国の文学にどのような影響を与えたのか， またロシア文学が外からどのように見られたのかを明らかにする上で有益な資料の一つとなるであろう。加えてロシア語やロシア文学に関する専門知識に関しては訳者の力量を大幅に超過するものであり、訳者としては、この翻訳を示し後学の叱責を請いたい。

本文に参考文献及び注釈は存在しないが，カザンザキスがクレタ語等ギリシア語の方言を用いている箇所が存在し、その箇所にのみ訳注を附した。尚，訳者が適宜補った原書に記されていない括弧については全て【】括弧でくくることで，本文中で著者が附している () 括弧と区別している。加えて、ロシア人の人名や地名及び書名に関してもギリシア語やギリシア風の表記がなさ

---

* KAZANTZAKHΣ, Νίκος (1999) *Ιστορία της ρωσικής λογοτεχνίας*, Αθήνα: Εκδοσεις Καζαντζάκη.
ニコス・カザンザキス (Νίκος Καζαντζάκης, 1883-1957) はクレタ島で生まれた。1906 年にアテネ大学法学部卒業後パリに留学し，ベルクソンやニーチェの哲学に触れる。12 年バルカン戦争に従軍し，17 年ヨルゴス・ゾルバスと共同で鉱山経営を行う（失敗)。19 年セフェリス内閣で厚生局局長として南ロシア，コーカサス地方のギリシア人難民の本国帰還支援に携わる。22 年ウィーンで仏教を，そしてフロイト研究を行う。次いで共産主義に傾倒し，3 度にわたるロシア訪問を経て共産主義の限界を悟る。以降執筆と旅行に没頭。第二次世界大戦期はレジスタンス活動に従事し，独軍撤退後はソフリス内閣へ入閣する。48 年からはフランスに移住し，執筆に専念する。57 年フライブルクで客死。

れているが、適宜ロシア語風での表記と、可能な限りキリル文字での表記を【】括弧によって記載した。

序章

ロシア文学【ΦΙΛΟΛΟΓΙΑΣ】の主要な特徴

ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は，地理的・民族的【φυλετικούς】な理由から，また歴史上・経済上の理由によって必然的に，全人類的な深みと固有の魅力をもつ際立った独特さ故に，明確に他国の文学とは異なるものとなった。

ロシア文学の主要な特徴は以下の七点に要約される。

1. ロシア文学は，単なる美しさを越えて宗教的，倫理的，哲学的な諸目的を追求している。ロシア文学者はいつも生と死の問題にゆり動かされ，【人生の】目的とは何か，大地の意味とは何か，なぜ我々は生き，働き，そして苦悩せねばならないのかを探求している。著述に従事するロシア人の目的は,美辞麗句を凝らした修辞の戯れにあるのではなく,詩的創造の私欲無き喜びである。彼の目的は読者に人間の権利と義務，そして希望の十戒を与えることである。文学【η τέχνη】は社会学的な宣教に，哲学的な揺さぶりに，そして倫理的探求となるのである。

2. ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は民主主義的である。ロシア民衆は文盲且つ怠惰で自身の運命に甘んじている。暗黒の力と迷信に満たされている。ピョートル大帝【Пётр I】によるロシアの欧化政策によって知識人たちと民衆の間の断絶はさらに深くなってしまった。

その思想を書き表すことのできた文学者は，滅多にいない例外であり，ただ豪華で美しい作品を生み出すためではなく，文盲で遅れた民衆を教化し啓蒙するためにその「魔法の」力を利用しなければならないと考えていた。

そして最も高貴なロシア人著述家と詩人たちは自身の義務を感じ，追い求めていた。自分たちのことを理解してもらおうと民衆の中に下った者もいれば，民衆の心に火をつけようと戦った者たちもいた。皆絶えず大衆との接触を求めたのである。

3. ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は自由を愛し，社会の変革を強く求める。政治・経済的独裁が悪の根源であると感じていた。この独裁こそ民衆の悲惨さ，文盲，精神的隷属の原因の大部分を占めている。

ロシア文学者は民衆の精神的，倫理的水準を高め，彼らの自由への権利と愛を教えるために戦った。

文学者だけが専制の圧迫と不正に抗うためにロシアで立ち上がり，唯一声をあげた存在であった。自由なジャーナリスト，政治家，社会学者といったものは存在しなかった。文学者がこれら全ての者の肩代わりをした。文学者だけが不正に身を晒された者，農奴，圧迫された者たちを擁護した。文学者だけが空想の作品の中で，自分の意識を明確に表そうとしたからである。民衆の指導者であり同時に精神的告解者でもあった。読者は不安を抱えながら作家にこう伺い，尋ねた。

「私は何をなすべきでしょうか」,「私はどうすれば啓蒙されるのでしょうか」,「私たちはどのようにすれば救われるのでしょうか」。

この故にロシアほど，文学【η φιλολογία】がかくも力と価値を得た国はなかった。ロシア文学【η φιλολογία】史は，必然的にロシア文明の歴史と同じものである。

4. ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は英雄的・証人的な特徴がある。その歴史の全てが絶え間ない英雄的な証言である。全能で暗黒の敵と戦わねばならない。1) 専制的な体制。 皇帝【τσάρος】，検閲，警察。2) 最良の教養を持つ社会【階級】。 皮相的，無関心，好色，臆病。3) 大衆。 受動的，無学，自身の運命に甘んじる。故に世界のどの文学【φιλολογία】の中でもこれほど多くの知識人たちが，かくも若くに死に，迫害を受け，流刑にされ，殺され，狂ってしまうものは存在しない。

ロシア文学者は犠牲の神聖さ，すなわち，全体の救済のために自分自身を滅ぼす必要を説いていただけでなく，初期の人々は血の模範をも与えていたのだ。

5. ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は独特な方法で，鋭い心理学的な分析を，【内面から表出する】外的な生の極めて正確な観察と描写に統合する。文学【φιλολογία】は，しばしば見られるような生理学的な感傷主義【παθολογική συχνά υπερευαισθησία】でもって深く掘り進んでいくということは決してなく，温かい同情をもって，人間精神の暗闇の地階へと下っていく。あまりに細かく正確に日々の外的世界が描かれることは決してなかった。純粋な理想主義と現実主義が統合されていた。

ロシア文学者たちは決して空虚で抽象的な議論に陥ることがなかった。また，現実主義的な生の単なる美文的描写に終始することもなかった。常に妥協無く，ロシア文学の主要な目的である，「私は何をなすべきでしょうか」,「私はどうすれば啓蒙されるのでしょうか」,「私たちはどのようにすれば救われるのでしょうか」という問いに対する教化【το κήρυγμα】を追求した。

故にかくも深くロシアの土壌に根差したロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は，かくも速くその局地的な国境を越え，全人類の普遍的な文学になったのである。

6. ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は重苦しい伝統から解き放たれている。辛うじて百年程と極めて若い。畏敬を持って見上げざるを得ず，その歩みを拘束するような過去が無いのだ。他のあらゆる文学【φιλολογίες】より自由度が高いが故に新しい形式を見出し，新しく大胆な道を切り開く力が備わっている。故に急激な変化と共に急進的な思想【θεωρίες】に投げ込まれたとしても，その形式を無視し，内容の中で構成的な明瞭さを犠牲にすることができた。今なお経験，バランス感覚，限度というものを知らない。あらゆる徳目を有しているが，新しいが故のあらゆる危険をも内包している。

7. ロシア文学【της ρωσικής φιλολογίας】の最新のソヴィエト的段階は新しい手法の創造を企図している。つまり内容の刷新である。もはやロシア皇帝に抗うのではなく，全世界的資本主義の専制に対抗している。それは新しい形態である。長々とした心理学的分析ではなく，一目で分かる，手短で明晰な内面と外面の実際を描く言葉である。映画的で痙攣を引き起こすような生のコマ割りと，現代の闘うロシアの熱気と勢いの影響である。

世界のどの文学【φιλολογία】も，ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】ほど勢いよく瞬く間に多産な影響を人類に与えることはなかった。ここのおかげで私たちは世界をより広大なものに感じ，自分たちの魂の暗闇により深く身を屈め，より活発に大地の痛みと喜びを目にすることができるようになった。ロシア文学【η ρωσική φιλολογία】は豊かに私たちの心を揺さぶり，ヨーロッパ文学のロマン主義と古典主義の窮屈な鋳型から私たちを解き放ち，もっと実り豊かに，もっと悲劇的なものとして生を見直すようにいざなったのである。

第一章

歴史的概観

古中世ロシア (-1700)

ロシア文学は，その萌芽の見られた土壌—ロシアの広大で肥沃な平野，不毛なステップ，森，大河なくして理解できない。

カルパティアからウラルまで，黒海から北極海にまで，果てしなく単調で，ただ低い丘と密林によってのみ遮られるロシアの平野とステップが広がっている。

自然の境界等というものは存在しない。広大な大地が海と荒野の如く広がり，住民たちに無限さと壮大さへの同質の感覚を与えた。そのような平野とステップこそがロシア人の「鷹揚さ」【η πλατιά φύση】や深く沈黙した精神的生を育むのである。その民衆の目からすれば，ロシアとは広大無辺な世界であり，そして世界とは，人々が同じように感じ，思考し，活動する，長大なロシア以外の何物でもない。ロシア人には外地や，人々が自分たちとは異種の人間が存在したり，また自分たちのものとは異なる必然や思想が存在したりする国というものは理解できないのだ。「お前が俺に言う外国ってのは何だ—ゴーゴリ【Гоголь】の『検察官』【Ревизор】でとある登場人物【ηρώας】が叫ぶだのだが—私たちの町から三年間馬を飛ばしたって，どんな外国にだって着きやしないのに！」

この広大無辺な領域に，民族的，気候学的なあらゆる差異を越え，共通の要素を持っている民衆が居住している。ほとんど同じぐらい波乱に満ちた歴史，同じ宗教，国家から課された同じ言語，専制的体制は以前より，民衆を吸収しそれぞれの民族の良心を圧迫しようとしてきた。

密林には，古代の時代より自分たちの革命的な思考や宗教的な見解【δοξασίες】により迫害された人々が逃げ込んでいる。故に北ロシアの森には極めて古い習慣や民衆の歌が生き残っている。

逆に，民衆のコミュニケーションおいては，大河が極めて重要な存在であった。岸辺に初期の植民都市が集中し，初期の都市が建設された。河川は，船体の長い丸木舟に乗せて，征服者としてのノルマン人をも導き入れ，北海からビザンツの港まで商品を運搬させた。

ロシア人の移住の傾向やアナーキーな性質，そして居を移し，一艘の船の中で神々と自分の子供たちを信頼し，逃げ出し，住居や食事，気候や生活様式を変える必然や巧みさというものも，河川によるところが大きい。

この無限に広がる大地の，様々な未開の民衆たちを征服した人々には次のものがいた。1) 政治・行政的機構と軍事的団結を与えたヴァリャーグ【варяг】たちである。2) 宗教，文字，技術，つまり文明の第一要素を全て与えたビザンツ人たちである。

1) スラヴ人たちは主にドニエプル川に沿って居住した。熱狂的に伝統に固執しながら男系家族ごとに散らばって住んだ農耕民であり，善良であると同時に野蛮人であり，怒りっぽい人々であった。自分たちの自由を心から愛し，勇敢に生命の危険を冒し，艱難を忍び，極端に名誉を重ん

じ，熱烈に踊りと歌を愛した。彼らの習俗は単純で原始的なものであり，妻は男性の奴隷であり，子供は父親の所有財産であった。派閥というものはあったが，より大きな組織や国家を持とうなどとは思いもしなかった。

まさにこのように同じく野生的な状況の中で，フィン人も北の方にいた。南東部ステップの遊牧民や狩猟民，また羊飼いのように漁や狩猟を行っていた。

初期のノルマン人たちは戦闘員であると同時に商人であり，九世紀頃に河川を越え，北極海から下って黒海に至り，そしてビザンツの地に到達した。フィン・スラブの地を横切りながら，川辺に要塞を建設し，集落を形成した。フィン人は海賊・商人たちを「ルオーツィ」【Ρουότσι】,スラヴ人は「ルーシ【Ρούς】」，ビザンツ人は「ロース【Ρώς】」と名付け，今日のロシアの名称はフィンにその起源を辿ることが出来る。

そのノルマン人たちの中核を成していたのがヴァリャーグ（つまり戦闘員）である。ネストル【Нестор】は，最古のルーシ人年代史家であり，確かにそのスラヴ人たちが古ノヴゴロドから使節を送り，ヴァリャーグたちに下って来て自分たちの無秩序に秩序を定めてくれるように頼んだことに言及している。「私たちの国は裕福で大きいのですが，秩序というものがありません。ですから私どもの所に来て治めてください！」

ヴァリャーグは兄弟であり首長でもあるリューリク【Рюрик】と共に南下し，川辺に要塞を築き，様々な奴隷民族【φυλές】を従え，見つけたものを買ったり奪ったりし，皮，琥珀，蜂蜜，蝋燭，動物，奴隷を売ってくれるビザンツへと下って行った。ヴァリャーグが戦の城砦と共に築いた川沿いの集落から，最初の封建君主と最初の広範囲を統治する国家の形態が生じた。征服者としてのヴァリャーグが統治機構と封建制を構成した。決して被征服者たちの経済的・社会的生活に入ることはなく，また彼らの宗教や習慣にも入ることがなかった。ただ彼らの服従と貢納のみを求めた。彼らは遊牧民の襲撃と内部の無秩序から被支配民の安全確保を請け負った。

しかし時間をかけてヴァリャーグは従属する民衆に吸収された。フィン人の中心であった古ノヴゴロド，そしてスラヴ人の中心であったキエフは少しずつ自分を征服した者たちを取り込み，もはや統一された大ロシア国家の大枠が描かれ始めていた。

2) スラヴ人たちは自分たちの宗教の基礎として先祖崇拝を行っていた。神々は自分たちの原型—冷酷で貪欲，そして強大な指導者に由来するものであった。彼らには特に聖職はなく，聖職者はいつも家の指導者であり，集団の最年長の者たちが共同の生贄を捧げ，祭儀の代表を務めた。その中で大きな祝祭は二つあった。【一つ目は】春の祭典であり,神々に作付けの豊穣を祈願した。そして【二つ目は】秋の祭典であり，神々に収穫を感謝した。特に神殿は存在しなかった。崇拝された場所は森や丘そして泉や川辺であった。

スラヴ人は，ヴァリャーグによってまとめられたのだが，ビザンツ人に対する侵略にしばしば従事した。レオン・ディアコノス【Λέων ο Διάκονος】（十世紀）は，彼らが密集した陣形を敷いて大海の唸りのように襲い掛かって来ることを記述している。敵から受けた傷によって死に至らしめられれば，来世において奴隷として彼らに仕えなければならないと信じていたので，敗北して

も投降せず切腹した。

スラヴ人の商業と戦争でのビザンツ人との接触は信義と精神的な交流であるかの様だった。野蛮人というものはビザンツの文明や聖堂【τους ναούς】や宗教的儀式を目にしたとき肝をつぶしたものだった。イーゴリの寡婦であったオリガはコンスタンティノープルに赴き洗礼を受け，彼女の乱暴者の息子ウラジーミルはキリスト教徒になった（988 年）。この新しい宗教と共に，諸思想，習慣，技術【τέχνες】，新しい現世と来世に関する理解がロシアの地に移植された。キエフは生成されつつある新しい文明の一大中心となった。教会が建てられ，ビザンツの修道士たちが移住し，職人が到来し，貪欲で田舎臭かった現地民たちは退廃的でより多くのものを所有していた外国人たちを模倣することに努めた。

テッサロニキ出身の二人のギリシア人修道士キュリロスとメトディオスは，ロシア民衆の偉大な使徒であり文明化の担い手となった。ただキリスト教を教えただけではなく，前者に関しては極めて広範な精神的ルネサンスの萌芽をもたらした。スラヴ・アルファベットを生み出し，教会の言語として南スラヴ・ブルガリアの言葉を導入した。この言語は，発音，言葉遣い，そして統語論においてスラヴ人たちに話されていた言語とは異なっている。しかしカトリック教会におけるラテン語のように全スラヴ民族【φύλα】に共通の典礼言語となり，こうして彼らの間で狭く統一された紐帯を作り出すことに成功した。

この典礼言語は文明の巨大な導管となった。スラヴ語の福音書，正教会の司祭たちの著作，ビザンツ人の倫理学的作品が翻訳された。まだ野蛮の地であったキエフは高度な文明，成熟したビザンツに負けまいと対抗した。

ビザンツによるキリスト教化は国家の運命に利便性のある影響をもたらした。ビザンツ人はロシアに初めての文明，つまり著述，共通の公式言語，技術に関する初めての諸作品をもたらした。しかしロシアを西の文明から隔絶させることにもなった。正教徒ロシア人は，「異端的フランク人」【αιρετικούς φράγκους】に由来する体制を憎むべき悪魔的なものだとみなしていた。西の人々がとりわけ関心を持たなかったというだけではなく，十三世紀頃に新生の正教の国家がモンゴル人の軛の下に陥った時は喜びさえした。西方からのロシアのこのような隔絶は—多大なる時間の損失と多くの困難を伴ったが—ビザンツの要素を下敷きにした豊かさを備えた，均質なロシア文明が形成される契機となった。

キエフの初期キリスト教化期の勢いは突然タタールの侵入と支配によって中断させられた(1240-1462) 。キエフは灰燼に帰し，ロシア国家は打ち砕かれた。宗教と典礼言語だけが結び紐のように残った。もはや全ての精神的な運動は修道院の中だけに限られてしまった。著述と読書はほぼ聖職者だけの特権になってしまった。深い暗黒が再び国土を覆い，無知が正教の聖職者たちを，一部の聖句には賛同せずに激しく論争する狂信者にしてしまった。宗教はまとまりのない束，迷信に堕してしまい，様々な異端が信者を離れさせ，世を離れ修道士になるのを理想だとみ

なさせた。多くの者が自分の魂を救うために去勢した。修道院は莫大な富を独占し，聖職者はムスリムの侵攻とも友好関係を結び，一緒になってその地を耕す貧しい農民【μουζίκους /мужик】を搾取した。タタール人が支配民の宗教と社会生活に入ってくることはなく，ルーシからはただ貢納だけを求め，非人間的獰猛さで徴税した。後に統治の有力者に徴税権を委ねた。この有力者たちは強大な権力を手中に収めた—圧制者に媚びへつらい，民衆を搾取し略奪した。

ロシア的生の中心は絶えず北へと動いて行った。リューリクの子孫はその臣民と共にタタール人から命を守るために北へと逃れた。新しい公国【ηγεμονίες】がウラジーミル【Владимир】，リャザン【Рязань】トヴェーリ【Тверь】に構築された。各公国は他から独立していた。その内の一つだけがそれらを統一していくことになる。全ての人がタタールの支配を認め，貢物を納めた。

ウラジーミル公国から一人の男【イヴァン三世】がさらに北方のモスクワに移住した。謀略と陰謀，そして殺戮で自身の権力を確立することに成功した。狡知を極め，敵対者の失敗と過ちの全てを利用した。リトアニア人の弱体化，国内の公国の失墜，タタール人の不和。リューリクの聖職権を要求し，ロシア民族【όλες τις ρωσικές φυλές】を統合するために戦った。最後にイヴァン三世は「全ロシアの長」と称した。

コンスタンティノープルが陥落し，唯一の正教帝国としてモスクワが残った。ヴィッサリオン枢機卿はモスクワ大公イヴァン三世にパレオロゴス家のコンスタンディノス・パレオロゴスの姪ソフィヤを降嫁させることに成功した。イヴァンはもはや自分自身をビザンツの玉座の後継者だとみなし，紋章として双頭の鷲を用いた。彼の後継者たちは皇帝（カエサル）の称号【царь】を使用し (1547) ，皇帝の息子たちが自分たちの間で父の死後に国土を分け合う習慣が廃止された。帝冠は，その国土を完全な状態に保つためにただ一人の後継者にのみ継承された。最後に，1480年にモスクワの皇帝イヴァン三世はタタール人への貢納を拒否し，こうして恐怖統治が静かに幕を下ろした。

タタール人による侵略の結果から一つ残ったものとして，南北ロシアの分断が挙げられる。十三世紀にはタタール人によって南ロシア全体が荒廃させられ，ウクライナはポーランド・リトアニア公国の手中に落ちた。これ以来，殊にウクライナ史—完全にロシアというわけでもなく，完全にポーランドというわけでもない—というものが始まった。数世紀にわたりウクライナ人は自分たちの民族【εθνική】と宗教のために闘った。この闘争はロシア全体の文明化の推進のために重要であった。

ウクライナには西方との極めて狭い接触が存在し，全ロシアの中で初めて西方文明の価値観を知った。同化の危機が差し迫っていた。民族【εθνική】的・宗教的意識を護るため，その敵から武器が貸与された。ラテン語に基づいたイエズス会の教育課程を真似た学校をリヴィウとキエフに開校し，万民のための教材と大衆のために平易化された作品を出版する印刷所を建設した。ウクライナにおいてまさに初めて民衆が啓蒙され，西洋文明に同化させようとする運動が起こったのである。

キエフは再びロシアにおける文明の中心地になり,モスクワよりも極めて上位の都市となった。

モスクワでは，ビザンツの伝統とタタールの影響によって，キエフとは大きく異なる新しいタイプのロシア国家が形成された。「キプチャク・ハン国【ジョチ・ウルス】を原型として，モスクワは，たった一つ，皇帝の意志のみを有する，戦闘的国家へとその姿を変えた。皆が—総主教，封建君主，民衆—皇帝の下に隷従した。大貴族【βογιάροι / бояр】（公国の象徴）と旧来の領主たちは彼の廷臣と奴隷になった。皇帝はあらゆる権能を一身に集めた。個人の自由が消失し，皆こぞって玉座の周りに跪いた。ビザンツ宮廷の奴隷制とタタールの非人道性が結び合わさった形である。

モスクワ人は，全世界から切り離され，外国人嫌い，移住者嫌い，狂信者になってしまい，ビザンツ帝国の唯一の後継者として自分たちを神に選ばれた者とみなし，西方からやって来た全てを毛嫌いした。第三の，そして最後のローマたるモスクワだけが真理を抱いていた。聖職者は，古い偶像礼拝のあらゆる残滓と日常生活に見られたあらゆる喜び—舞踊，歌謡，自然崇拝的祝祭—を怒り狂って迫害した。楽器は押収の上皇帝の勅令の下に焼却され，彫刻は悪魔の所業，偶像の母として迫害された。絵画は厳格なビザンツ様式に追随する他なかった。聖人の顔，髭，手つき，袴の折り目はどうあるべきかといった具合に。現世の生は涙のくぼみ【κοιλάδα δακρύων】だとみなされた。現世の生の目的は来るべき永遠の生を私達に準備させることだった。救いとは，司祭たちの伝統を狂信的に維持することである。あらゆる新しさは死をもたらす罪であった。

しかし徐々にこの暴君モスクワにも進歩の必要性が押し迫って来た。学者と教授たちがモスクワにも学校を組織するためにキエフから招かれ，外国の建築家たちがクレムリンと多くの修道院と宮殿を建設した。ますます話し言葉がその権利を獲得し，民衆の書籍や行政の中でも使用され始めた。死語となった【古代教会】スラヴ語は時間の経過と共に教会の中に引き下がる事となった。

イヴァン三世 (1462-1505) とイヴァン雷帝【Иван IV】(1533-1584) の治世には，モスクワは最大の商業中心地となった。新しい商業路白海【Белое море】から西ヨーロッパまで，主にカザンとアストラハンの征服後に，他の道路が中央アジアとペルシャに向けて切り開かれた。商業の発展は経済的な動揺を封建制にもたらした。旧来の領主たちは，浪費に明け暮れ，働かなくてすむ生活を続けることが出来るように，農民たちの搾取を強めていた。農奴の地位は絶望的なものになった。農民たちはモスクワ国家の国境の外の「自由の国々」に押し寄せた。このようにしてコサックのウクライナへ，そしてドンとウラルへの開拓【εποικισμός】が起きた。

同時に封建的な大貴族【βογιάρων】と商人の市民階級の間での闘争が激化し始めた。より下位の貴族は都市民の味方につき，コサックたちが封建領主たちに革命を起こし，都市民たちは自分達の利益のために農民【μουζίκων】の騒乱を利用した。

1613 年都市民とより下位の貴族は，総主教フィラレートの息子である新興貴族フョードル・ロマノフ【Фёдор Романов】を玉座に上げることに成功した。市民階級の勝利である。貴族たちは不平を訴えたが，農民たちの絶対隷従を獲得することで和解した。農民たちは忍従し，革命を起こそうとしたが，彼らの解放への努力はいつも流血の中に押しとどめられた。

経済的，社会的，精神的な闘争と共にロシア中世は 1700 年まで続いた。あらゆる中世と同様に暗黒で豊穣であった。ロシアの支離滅裂な混沌は，ヴァリャーグ，タタール人，最後にはロシアの諸公国を経て階級を区切られ，絶対服従の下に投げ込まれた。新しい宗教が野蛮な偶像を消滅させ，不揃いなあらゆるロシアの民衆を精神的に統合した。共通で公式の言語，著述，そして共通の文明的要素を獲得した。

同時に新しい宗教の狂信的な聖職者たちは偶像崇拝と古い習慣を惹起させるあらゆる民衆の表現を圧殺することに苦心した。しかし古いロシア精神【την παλιά ρωσική ψυχή】を完全に消失させることは出来なかった。あらゆる中世で栄えたものでもあるが, 民衆の詩, 叙事詩が大貴族【των βογιάρων】の宮廷と宗教的な守護聖人祭，或いは民間の祝祭の中に帰って来て，新しい，キリスト教という名でロシアの過去の英雄と神々を歌い上げた。このように，あらゆる無慈悲な迫害を経て，純真で着想豊かな中世のロシアの民衆詩が可能であり，保存された。

第二章

中世における大衆の文学的【φιλολογική】生産

民衆詩

民衆詩には大きく二つの迫害者が存在した。狂信的なキリスト者と後にヨーロッパ化された都市民である。しかし互いに遠く離れた国土において，農民【οι μουζίκοι】たちは放浪の吟遊詩人たちを温かく迎え，一心不乱に彼らの歌に耳を傾けていた。今日においても，小舟で漁に出かける時にも吟遊詩人を尊敬し，彼に艪を握らせたりはしない。「一緒においでなさい。あんたのために一肌脱ぎましょう。あんたさまは昔の話をきかせてくれるだけでいいんですわ。」

領主と農奴，知識人と文盲の間の亀裂が大きくなるにつれて，農民は一層嫉妬深く強情になって自分達に古くからあったものを愛するようになった—歌，踊り，童話，伝承，冗談の類である。

十六世紀から十七世紀にかけての公会議の典礼も「悪魔的」な踊りと不浄な歌に対する呪いの言葉でいっぱいであった。後に教養人たちは「低俗な」民衆詩や童話を聞くのを恥じるようになった。

このように民衆詩は常に軽蔑され，主に森や北の農家など，更に遠くに避難場所を求めた。幸運にも十九世紀初頭より知識人達が民衆詩の価値に関心を寄せ，散在し，絶えず失われてゆく民俗学的素材を集積し始めた。驚くべき忍耐と自己犠牲によってロシアの有識者【σοφοί】たちは，まだ生き残っていた歌をできるだけ多くかき集めるために広大無辺な国土を，主に極地の客のもてなしの悪い地域を駆け巡った。彼らはしばしば苦難や未開の民族【τις βάρβαρες φυλές】によってばかりではなく，敵意のまなざしをもって自分たちを追跡していた皇帝の警察によっても命の危険にさらされた。民衆の生活に関する各々の研究は疑わしいものであり，また体制を革命しようとする意志があるのではないかと思われたからである。

彼らが集積した民俗学の宝庫は極めて貴重である。というのも，私達に中世ロシアの民衆の生と魂を示してくれるからである。もちろん英雄叙事詩は，大貴族【των βογιάρων】の宮廷において【詠唱された時】か，或いは民衆の祭りにおいて詠唱された時では内容においても言語においても変化した。またこれらの歌は，かつて人々が望んだようには，偶像礼拝的な宗教や前キリスト教時代の民衆の生態を明らかにしてくれなかった。歌の多くは外から入って来たもので，ヨーロッパやアジアを渡ってロシアにやって来た様々な民族【τις διάφορες φυλές】と共に入り込んできた。しかしこれらによってロシア精神【ψυχής】の驚くべき想像力が明らかとなり，私達は，民衆が想像力の中で統合して保存した悠久の痛ましい歴史を知ることができるようになった。

1. 英雄叙事詩。—ロシア人は自分たちの言い伝えを一つの大叙事詩にまとめ上げはしなかった。いくらかの分布圏【κύκλοι】，個々の詩歌，様々な英雄の言い伝えに関する形態が存在している。だがこの上無き天才がそれらを一つのまとめ上げられた総体に集成するということは決してなか

った。叙事詩人たちは領主の塔や宮廷，饗宴や祭りの場へと帰り，英雄の勇猛さを褒め称えた。教会が彼らを迫害し始めた時，叙事詩人たちは「スコモロヒ」【скоморох】—道化師であると同時に歌手であった—にとって代わられた。彼らは風刺をこめて歌うだけではなく，しばしば祖先の勇猛さも歌った。しかしながら彼らの同時代的な生活や新しい要素，つまり低俗な冗談を付け加え，権力者に媚びへつらったりからかったりするために即興で演じた。歌の後には「道化者」になった。つまり身振りによるパフォーマンスや農民の踊りである。

同じように，ここでみたような模倣の拡張は西ヨーロッパにも存在したが，急速にその道は分かたれた。西方では，模倣は常に改良を施され，歌手は絶えず繁栄する騎士の生を賛美し，城主の城砦に閉じ込められている穏やかな女性たちに気に入られるように繊細になっていった。ニーベルンゲン，ローラン，磔刑等で競争的な分布圏が形成された。トゥルバドゥールは暖かいプラトニックな愛を賛美するために極めて繊細な表現を見つけ出した。勇敢な騎士たち，そして夢見る貴婦人たちにまで広まった。

ロシアでは反対に，歌手たちは宮廷や城主から迫害を受けた。より上位の社会階層からも迫害を受け，より野蛮で遠い田舎へ，凍てついた極地の海或いはコサックのステップへと逃げ込んだ。貧しい漁師たちや野蛮で蒙い農民【μουζίκους】にも広まり，歌にはこのような海辺のあらゆる粗野さと未開さがあった。およそ千年後の十九世紀の初め，アルハンゲリスク【Архангельск】やオネガ湖【Онега】の周辺に，キエフの南部辺りで生まれ，ウラジーミルとコサックの英雄を称える数百の未知の民衆歌が発見された。歌手たちは自身の周りにいた人々の中に吸収されて漁師や農民になり，もはや歌謡を専門職業としては営まなくなった。しかし祝祭やいつ終わるとも知れない冬の宿直には，古い英雄の曲を歌い，世代から世代へ口承で受け継いだ。或いは年老いた語り部たち，「スカジテリ」【скажитель】が古い民話を詳しく話した。

英雄歌は主に「ブィリーナ（諸出来事）」【былина】や「スタリナ（昔の話）」【старина】と呼ばれた。これらは大きくキエフ分布圏，ノヴゴロド分布圏，モスクワ分布圏の三つの分布圏に分けられる。

1) キエフ分布圏。この伝承の分布圏の中心は，聖ウラジーミル【Владимир I】，「光の太陽」・「愛する領主」である。ウラジーミルはキリスト教の擁護者であり修道院の建設者，キエフの修繕者として称えられる。彼は教会と修道院，聖遺物と宮殿で聖都市を豊かなものにした。宮廷では彼の美しい伴侶・アプラクシヤが光を放ち，不信者たちと，特にタタール人と戦うため全世界に騎士たちを派遣する。しかし，しばしば民衆歌において，聖ウラジーミルは予想もつかない無礼さでもって，疑り深い人間として，そして嫉妬から勇敢な味方の騎士たちを殺し，臆病で気難しく腹黒い人間として非難される。

この分布圏の真の民衆的英雄はイリヤ・ムロメツ【Илья Муромец】という農民である。彼の偉大な力は奇跡によるものである。三十三歳までイリヤは小さなムロメツに近い小さな村にある，父のあばら家の中で麻痺したまま病床についていた。ある日巡礼者が通りかかり，イリヤのあば

ら家の戸を叩き彼に叫んだ。—「イリヤ，農家の息子よ，戸を開けなさい。—嗚呼，できません，イリヤはため息をつき，私の体は動かないのです！—イリヤよ。早く自分の脚で歩いて戸を開けなさい。」イリヤは起き上がり，戸を開けた。二人の巡礼者は並々と注がれた杯を彼に飲むように差し出した。イリヤは飲むとたちまち，心臓が沸き立ち始め，色白かった体が汗でびっしょりになった。—「気分はどうだ，イリヤよ。—大地も私を持ち上げることが出来ない程の大きな力を感じます。」—

イリヤはすぐにキエフに行ってウラジーミル王に仕えタタールと戦いたいという衝動に駆られた。彼の父は身を屈めて息子に呻いた。—「こいつは一体，湿った樫の木だって地面にまでは折れ曲がったりしないというのに。—紙の葉っぱだって地面に落ちやしないというのに。息子が王の前に跪いておる。—そして王に恭しく祝福を請うておる。」

年老いた農民である父イヴァン・チモフェイェヴィチは彼に呻いた。「お前のよい行いには儂の祝福を—悪い行いには呪いがあるように。—タタール人には悪い思いを抱いてはならん。—良いキリスト者になったのなら，殺してはならんぞ。」

イリヤは主人の命令を受け入れた。その持てる力を全てその王国とやもめと孤児を護るために用いている。決して自己の利益と自身の栄光を考えない。好戦的な態度を取らず，民衆の智恵を大切にした。食べて飲み，危険を前にしても酔っぱらい，しばしば農民【μουζίκοι】のようにユーモアにあふれた冗談を言っていた。

イリヤがキエフに向かう途中でもその勇猛さが発揮され始めた。チェルニゴフ【Чернигов】の町を，そこを包囲していた敵から解放してやったが，そこの公【ηγεμόνας】になることは固辞した。九つの樫の木に巣を作っていた，半鳥半人の怪物の恐ろしいソロヴィヨフ【Σολόβιεφ】(「燕」)という強盗を殺した。大きな宝を見つけ出したが，修道院と教会を建てるために使ってしまった。

他のキエフのブィリーナの英雄には，ドブルィーニャ・ニキーチッチ【Добрыня Никитич】とアリョーシャ・ポポヴィチ【Алеша Попович】がいる。イリヤとは分かちがたい三人の仲間であり，ステップの国境を護りタタール人を挫く国境警備兵であった。これらの英雄の特徴は明確に書き分けられている。ドブルィーニャは親切で，騎士の容貌を持ち，名誉を重んじ恐れを知らなかった。アリョーシャは嫉妬深くて腹黒く，嘘つきであるばかりでなく第一級の危険人物であった。ドブルィーニャの友人の死を知ったとき，この友人の美しい寡婦アナスタシヤをものにするために奔走した。はじめこの寡婦は拒絶したが，次第に妥協するようになった。しかし結婚式が執り行われようとしたとき，ドブルィーニャが歌手のような装いをして駆け付けた。彼に葡萄酒が振舞われた。彼は婚約指輪を杯の中に投げ込み，妻は彼がどんな男か知るようになり，大恥をかいた。アリョーシャは逃げ出した。

ブィリーナを解釈するために多くの理論が生み出された。最初期のロシアの民俗学者は，ヤーコプ・グリムとマックス・ミュラーの理論から影響を受け，ブィリーナはインド・ゲルマンの神々のきわめて古い痕跡を含んでいるという説を支持した。ウラジーミルは太陽の神であり，イリヤは雷である。1868 年ごろウラジーミル・スターソフ【Владимир Стасов】の説が提唱された。全

てのロシアの叙事詩は東方に起源を持つ。タタール人がそれらと一緒にインドとイランの叙事詩の伝説上の英雄をもたらして流布させた。イリヤはペルシャのルステムであり，ドブルィーニャはコリスナである等々といったものである。

比較民俗研究者に契機を与え，ロシアのブィリーナは多くの東方の影響だけでなく，聖書と聖人の生涯と同様にゲルマンとフィンの影響も受けているという説が今日受け入れられているので，これらの理論の一方だけが使われた。同時に多くの英雄叙事詩が歴史上の出来事を含んでおり，それを変形させている。

キエフ分布圏には三つの極めて古いブィリーナも属している。スヴャトゴール【Святогор】，ヴォリガ・スヴャトスラヴィチ【Вольга Святославич】，そして農民のミクラ・セリャニノヴィチ【Микула Селянинович】である。

スヴャトゴールは，大地も彼を持ち上げることができないほどに強大であった。誇って曰く「もし天に取手があり，また大地にもあるのなら，右の手で天を掴み，左の手で大地を掴み，力ずくで天と大地を裂いてやろうものを。」

ある日彼はイリヤと出会った。イリヤは百年樫を真っ二つに割くことができるように彼に剣を渡した。しかしスヴャトゴールは意固地になって問いただした。「どのような蚊が俺を刺したというのだ。」振り返ってイリヤを見やり，腕を伸ばして彼のポケットに手を入れた。しかしスヴャトゴールが余りに傲慢だったので，神は彼を謙遜に辱めを与えようとした。ある日スヴャトゴールが馬で通りがかったとき，ステップに背が低く，恐ろしく醜い男が肩に頭陀袋を担いでいるのを目にした。彼の所に行くために馬に拍車をかけた。馬は疾走し山と平野を越えたが彼の下にはたどり着かなかった。この見知らぬ農民【μουζίκο】の下に行くことはついにできなかったのである。しかし彼は急いでいるわけではなかった。同じ足取りで彼は歩み，時々肩から肩へ頭陀袋を担ぎ変えただけであった。

スヴャトゴールは稲妻のように走り，叫んだ。「止まれ！止まれ！」見知らぬ男は立ち止まり，大地に頭陀袋を下ろし立ち止まった。スヴャトゴールは叫んだ。「頭陀袋に何を入れているんだ。—持ち上げて中を見ろ！」スヴャトゴールは振り返り，手に鞭を持取りそれを渡すように挑みかかった。しかしうんともすんともしなかった。スヴャトゴールは小指で持ち上げようと掴みかかった。だができない！馬から降りて，片手で持ち上げようとした。頭陀袋は決して動かない。「なんてことだ！」怒って叫んだ。「俺はこの大地で最も偉大な英雄なのに頭陀袋一つ開けられないとは！」両手でつかんで全力で引っ張ったところ，何とか最後には膝の高さまでは持ち上げることが出来た。しかし同時に大地にめり込み，顔は血のにじんだ汗でいっぱいになった。—「しかしお前はこの袋の中に何をいれているんだ。」不安がって尋ねた。—「知りたいか。いいか！この頭陀袋の中には全大地が入っているのだ。」

二人目の英雄はヴォリガ・スヴャトスラヴィチであり，王女と蛇の息子であった。「蛇は王女の緑のサンダル，絹の靴下の周りにとぐろを巻き，脇腹の下着にまで近づいてきた。・・・」彼が生まれたとき，「湿った大地が揺さぶられ，輝く海がうねりを打ち，鳥々は雲に隠れ，野生の動物た

ちは震えながら森に隠れた。万物が自分たちの指導者の誕生を感じた。そして可愛らしい赤ん坊が絹に包まれた揺り籠の中で眠っていた。」母親はいくら食べても彼が満腹しないことに仰天した[1]。柔らかな産着で身をくるみ甘い歌であやした。だがこの赤ん坊はたった一時間で他の子どもが一年で成長するのと同じぐらいの大きさに成長した。一時間半で十八月分大きくなった。突然母親に向かって叫んだ。—「お母ちゃん，僕におしめを穿かせたり赤ちゃん用の服を着せたりしないでよ。僕の体中に青銅の武具を着せて，金の兜と太い棍棒をちょうだい！」

ヴォリガが七歳になったとき，この地で最も勇敢な男であった。彼に読み書きを教え，賢く，また狡知に長けるようになった。あらゆる先生に教えを乞うた。ある日母親にこう言った。「お母ちゃん，今日まで僕が学んできたことはどうでもいいことだったんだ。僕は今自分がなりたいもの—鷹と狼と獅子になるために，魔術の勉強がしたいんだ。」母親は彼に祝福を与え，ヴォリガは魔法使いの国に出かけて行った。たった二年で全ての魔術を習得した。ロシアで最もよい二十九人の勇者を集めた。皆若く，力強く美しかった。皆脚の速い馬，丈夫な弓，鋭利な剣を持っていた。「しかし彼らの下にあった最良のものは信仰であった。」ある日ヴォリガはミクラに出会った。三日間ヴォリガは二十九人の仲間たちと一緒に彼を探して馬を走らせた。ミクラは野を耕していた。ヴォリガは彼の所に来て，自分の力を自慢して言った。「俺と一緒に来いよ。ミクラは答えた。—喜んで。ですがまず私の鍬を持ち上げて，それを低木の所に埋めてください。」ヴォリガは鍬をなんとか持ち上げようとしたが，かなわなかった。他の人々もやって来て一緒になって引っ張った。しかし鍬はびくともしなかった。その時農民【μουζίκος】のミクラは片手でそれを持ち上げて低木の中にそれを投げた。

キエフの崩壊に関するブィリーナもまたとても興味深い。英雄たちは喜んで戦争から帰って来た。タタールの大軍を打ち負かしたからである。七人の将軍たちは誇り歌った。「私たちの屈強な両肩はまだ力が余っていて，馬どももまだ疲れてはいない。鋼鉄の剣はまだ切れ味が鈍くなってはいない！」そしてアリョーシャ・ポポヴィチが叫んだ。「もしこの大地の者でない敵が私たちの前に現れたとしても，我々はそいつを喰らってやろう！」そう言い終わるや否や，二人の若い騎士が進み出た。「我々と戦う者は進み出よ。我々は二人だが，そちらは七人でも一向に構わんぞ！」アリョーシャが飛びかかり，この見知らぬ騎士たちの四肢を剣でぶった切った。しかし突然二人の代わりに，敵の騎士が四人彼の目の前で見ている。ドブルィーニャが飛びかかり，打ち倒し，彼も敵の頭をぶった切った。しかし四人の代わりに，今や騎士たちは八人になった。イリヤが剣をもって打ってかかり，彼も彼らをぶった切ったが，今度は 16 人になった。こうして人数が増えていき，大地は兵士でいっぱいになり，恥じ入った英雄たちは敗走し洞窟に逃げ込んだ。しかし彼らが山に近づくとすぐに腰が抜けてしまった。後のブィリーナの曲に曰く，「あれ以来「聖なるロシア」には誰一人として英雄など存在しないのだ！」

[1] Ιδομενέως 2013: 181 ここでの「仰天した」はクレタ方言の αποκαμαρώνω である。

2) ノヴゴロド分布圏。ノヴゴロド分布圏は【キエフ分布圏と】完全に異なったものである。私たちはもはや黄金の丸天井，敬虔な王たち，そして勇敢な騎士たちのいるロシアキリスト教の首府キエフにいるのではない。ノヴゴロドは船と商売の町であり，ここの住民は豊かで真面目な，旅慣れた商人である。ノヴゴロドは当時北のヴェネツィアであった。

商売のために海,川,無限に広がる荒地を越えて来た大胆な商人と探検家たちは商館を築いた。それと同時に，民衆との途切れることなく続く内戦において，商人たちは裕福な主教たちに統御されていたが，喧しく，自由を好む民衆的な人々であった。

ノヴゴロド分布圏には二人の主要な英雄が存在する。裕福な商人であるサトコ【Садко】と勇敢な若者のヴァシーリー・ブスラーエフ【Василий Буслаев】である。二人とも十二世紀の歴史上の人物であった。サトコははじめ裕福な商人の食卓を楽しませながら生きていた貧しい歌手であった。ある日彼は食卓に招かれず,また次の日も,そしてその次の日も招かれることがなかった。悲嘆に明け暮れながらイリメニ湖【Ильмень】の埠頭へと向かい，ハープを奏で始めた。水面が揺れ動いて泡立ち，突然海の王が目の前に飛び出て来た。純真で怒りっぽく冷酷であったが，同時に音楽の魅力を解するものであった！—「サトコよ，聞きなさい。お前の歌がかくも我が喜びであったので,お前を大きなものにしてやろう。家に帰ってノヴゴロド一の金持ちになるがよい！」そして本当に,数日のうちにサトコはノヴゴロド一の大金持ちになった。三十隻の船を武装させ，遠くの国々に送った。しかし恐ろしい大波に見舞われた。海の神を宥めるために一バレルの銀を投げ捨て，一バレルの金を投げ捨てたが，無駄であった。誰が海に身投げすべきか籤を引き，籤はサトコに当たった。彼は自分の最も高価な毛皮を身に着け，片方の手に聖ニコライのイコンを持ち，もう片方の手にハープを持って波に身を委ねた。海の底に到達した。海の王は岩の上に座り，彼の傍にはその妻が控えていた。「私はお前にロシアで一番高価なものは何か，金か，それとも鉄かと大きな声を出して問うたのだ。—鉄でございます。サトコは答えた。なぜなら，鉄がございましたら，あなたの望む金を稼ぐことができるからです。—ハープを弾いて私を楽しませてくれ！私に歌ってくれ！と王は言った。」

サトコが弾き始めたことで王が踊り出し，波がたって船は難破し，船乗りたちが遭難した。聖ニコライという老人が一人サトコの肩に手を置いた。「ハープを叩き壊せ。悪魔の歌を止めるのじゃ。」サトコはハープを叩き壊し，王が踊るのをやめ，海が穏やかになった—そしてサトコはノヴゴロドに戻り，平穏な気持ちでノヴゴロドの海辺を散歩し，絶望しながら彼を探していた仲間たちを見ながら笑っていた。その時サトコは自分の高くついた救いのために，聖ニコライの教会を建築した。

ヴァシーリー・ブスラーエフは,薄っぺらで嫉妬深い,当時のノヴゴロドの若者の典型である。彼の父は穏やかな人であった。「九十歳でもう口には歯が一つもない。そして彼はキエフで口論したこともなく，母なるモスクワででも一度もない。」

ヴァシーリーが生まれたときにはもう老人で，彼に文字と歌を教えた。ヴァシーリーはノヴゴ

ロドーの歌手になり，最も精悍な勇者になった。「冗談がきつい。彼は手から取ったとき，肩から腕をはずし，足から取ったときは上半身から脚をはずした。腰から取ったとき，彼は背骨を取ってしまった。」

ヴァシーリーが十四歳になったとき，父親が死んでしまった。最上の勇士たちを集めて，農民たちと喧嘩になってしまったので,母親は彼を地下に閉じ込めたのだが,この英雄は逃げ出して，危機にあった自分の仲間を助けるために駆け付けた。彼は大勢の民衆を殺した。「子種さえも」残したくなかったのである。最後に彼の母親が彼の下に駆け付け，息子を抱きしめた。「いい，よく聞きなさい。心を落ち着かせて。もう人を殺してはいけません。あの人達も子どもを生んでいくことができるように，男性も少しは残しておくのよ。—嗚呼，お母ちゃん。お母ちゃんは僕の愛する人だよ[2]。言うことを聞かなくちゃ。」

ヴァシーリーは若くして人を殺し，旅し，強盗も働いた。もう年老いてしまったかのように，自分の魂の救済を望むようになりイェルサレムに巡礼した。道中彼に死の兆候が現れた。しかしこの英雄は兆候を重要なものだとは思わなかった。イェルサレムに到着し，聖墓に祈祷し，ヨルダン川に行った。彼は裸になって泳ぎたいと思った。一人の老婆が,【裸で泳ぐことは】罪であり，服を着て泳がなければならない，と叫んだ。しかしヴァシーリーは夢も預言者も信じず，裸になって入水した。だが神は罰を与えるものである。ヴァシーリーは帰国の途につき，山を越えようとした。彼は馬共々岩場に落ちて砕け散った。

3) モスクワ分布圏。この分布圏の中心的な英雄は，イヴァン雷帝である。ブィリーナは，歴史が私達に教えてくれるような偉大な皇帝を提示しはしない。イヴァンは貴族たちに対して極めて冷酷であった。国家の厳格な統一を確固たるものにするため，全ての者に跪かせることを望んだ。だが小さな民衆を愛し，喜んで彼の宮廷で歌われる叙事詩に耳を傾けた。

彼の悪事は全て,悪い忠告者である,血に飢えたマリューター・スクラートフ【Малюта Скуратов】のせいである。彼の右側には良い天使である大貴族【βογιάρος】のニキーター・ロマノヴィチ【Никита Романович】がいた。イヴァンの婿であり，ロマノフ家の祖先であった。イヴァンはこの二人の付き人—天使と悪魔—のあいだで揺れ動いていた。

あるブィリーナにイヴァンがカザンを手に入れた話が登場する「カザンの桟橋の下を掘った—黒い火薬の入った樽を積み重ね—導火線に火をつけた。—タタール人たちは桟橋の上で笑い声をあげた。—彼に尻を向けた。—見よ，我が皇帝よ，お前はカザンをこうして手に入れるのだ！—皇帝の心に怒りがこみあげた—砲兵たちを絞首刑に処すように命じた。一人の老人が話す許可を求めた。—嗚呼，皇帝陛下，どうぞ忍耐なさってください—大気中では導火線は速やかに燃えます。—そして大地の下ではゆっくり燃えるのです！—言われていたようにカザンはよろめいています。—その全体が滅亡の淵に立たされ始めています。—皇帝は大喜びした。—砲兵のそれぞれ

[2] Ιδωμενέως 2006: 213 ここでの「愛する人」はクレタ方言の Κερά である。夫婦関係や家族関係において，個人的に親しい女性に呼びかける際にも用いられる。

に五十ルーブルを与えた。—そしてその老人には五百ルーブルを与えた。

タタールの女帝がイヴァンの足元に跪き，「パンに塩を散らした」。皇帝は彼女を赦しキリスト者にしてエレーナと名付けたが，鎌でその夫の目は潰した。しかし暴君イヴァンは無垢な民衆を殺したことを悲しみ，叫んだ。「キリスト者ではないが，彼らも人間ではないか！」

他のブィリーナはイヴァンの暗い私生活—何人かは殺してしまい，何人かは修道院に幽閉してしまった七人の妻を，最後にはどのように愛する実の息子を殺したのかを歌った。「暴君イヴァンは上に下にと宮廷を歩き回った—赤い窓越から見つめている—大きな櫛で黒髪を梳く。誇って言った。私こそが帝都【Τσαριγράδ】（コンスタンティノープル）からモスクワへと玉座を移さしめたのだ—私こそが紫色の帝衣を初めて纏ったのだ。私がカザンとアストラハンを治めている—私はキエフとノヴゴロドの裏切り者を討った—母なるモスクワの裏切り者をも白い桟橋で討つだろう。」

そこで一人の大貴族【βοιάρος】が立ち上がった。「イヴァン皇帝陛下，—あなたはキエフとノヴゴロドの裏切り者を討たれました—ですがモスクワの裏切り者を討つことは出来ないでしょう。—彼らはあなたの宮廷の中にいます。—あなたの傍に座っているのです—あなたと同じ皿から食べています。—あなたと同じ服を着ています。—裏切り者は皇太子フョードルです！」

イヴァンは激しく怒った。「私にはもはや信頼できる屠殺人はいないのか。マリュータが上から現れた。—陛下は私に手を挙げさせることをお望みですか。—私の手が震えることはないでしょう—皇太子の白い手を握っています。—指からやっかいな指を—モスクワの川に引き込みます･･･」

他のブィリーナはシベリアの征服者イヴァンと彼の公正な統治を称賛している。イヴァンには二人の息子がいた。粗野なイヴァンと善良で穏やかなフョードルである。イヴァンは彼の兄弟を非難した。「お父様，あなたはお通りになった場所で，—虐殺し，殺害し，串刺しにしました。私は自分の通った所ではどこでも—虐殺し，殺害し，串刺しにしました。—フョードルが通った所からはどこでも，—思いやりをもって手紙を書いたのです！」

民衆歌はイヴァンの強大な野蛮さ「賢い頭」を称えた！「我が神よ，彼は震えているが，思いやりのある者です。善良な者には思いやりを持ち，悪人には震えあがってしまうのです。」

これらのブィリーナは十七世紀には新しいテーマが続いた。偽ドミトリー【Лжедмитрий】，シュイスキー【Шуйский】王子，偉大な革命者ステンカ・ラージン【Стенька Разин】である。

十八世紀のブィリーナに霊感を与えた大人物はピョートル大帝である。実際，歴史的ブィリーナの二人の中心的な英雄は極めてよく似ていた。そしてこの二人は強情さ，深い洞察力，苛烈さをもって自分たちの目的を追求した。イヴァンは強力な大貴族【βογιάρους】を一掃しながら自身の王笏の下に全ロシアを統一しなければならなかった。ピョートル大帝は西方の文明を導入しながら国土を再建して文明化しなければならなかった。二人とも彼らの業績に抵抗した自分自身の息子を殺した。二人とも敵と裏切り者に囲まれていた。二人とも彼らの時代の中では極めて教養があり，外国人を愛し，大理想【μια μεγάλη ιδέα】そしてその理想の英雄と犠牲に支配されていた。ピョートル大帝は暴君イヴァンの業績を完成させた。ブィリーナの中で，民衆は二人の偉大な皇

帝を一つの存在であるように感じていた。

あるブィリーナはピョートルの寛大さを称えている。「どうしてモスクワでこれほど嬉しそうにしているのか—正教徒の皇帝はアレクセイ・ミハイロヴィチ【Алексей】か。—今日神は彼に息子を与えた—皇太子ピョートル・アレクセイェヴィチである。—ロシアの大工たちは一晩中眠っているということはなかった。—揺籠を作っていたからだ。—そして美しい少女たちも一晩中眠っているということはなかった。—幼児の服を縫っていたからだ。—白い金の刺繍されたビロードの。牢番は牢を解き放ち，囚人は牢を出た。—皇帝の倉庫番は倉庫を開いた。—そして民衆に穀物を分け与えた。—食卓が敷き詰められた。—大貴族【βογιάροι】も民衆も皆が—食べて飲んだのだ！」

これらのブィリーナはピョートル大帝が若い時期に，どのように遊び，喧嘩し，玉座に上り，アゾフ【Азов】の不信者たちとどのように戦って勝利したかを描写している。「転げ落ちたのは石ではなく—不信者たちが桟橋から落ちた。—野を白ませたのは雪ではなく—ムスリムたちの白い乳房だった—雲から滴ったのは雨ではなく—汚れた不信者たちの血であった。」

ピョートルは皇帝たちの始祖であり，ロシアの外へ旅しようと決心した。「魂は知らない，魂は入ることが出来ない—私たちの主，皇帝が行こうとするところへは—小舟を銀で満たせ—その小舟を輝く黄金で装飾せよ・・・—聞け，聞け，我が同胞！私を皇帝と呼んではならぬぞ—海を股にかける商人と呼んでくれ・・・」

これらのブィリーナは彼が見たことや外国で忍耐したことをできる限り多く物語っている。母国に戻ると，裏切り者たちが彼を取り囲んでいたが，彼らを容赦なく撃ちのめし，モスクワを去って新しい都市を建築した。モスクワを打ち負かしたいと思っていた忌々しい都市が，ある日沼地の中に沈んでしまうだろうというお告げがあった。ピョートルは反キリスト者であり，西方から悪魔を連れてきて聖なるロシアは破滅してしまった。しかし他のブィリーナは，無慈悲に民衆から盗み圧制を敷いた領主たちを打倒したので，無教養な皇帝を称賛している。「嗚呼，彼は何という皇帝だろう！—パンを不正には食らなかった—ブルラク【бурлак】（漁船で働く人）よりも犬のように働いた。」

彼が死んだとき，民衆は不安に襲われた。「棺から立ち上がってください—ロシアの白き皇帝よ！—起きてください，皇帝，私達の太陽よ！」

それ以来，ブィリーナの地位は低下し，如何なる詩的霊感もそれに再び命を与えることはなかったし，如何な偉大な形態ももはや民衆の魂を満足させることはなかった。わずかな民衆歌だけがドルゴルーキー【Долгорукий】公の苛烈さと強盗ヴァンカ・カイネ【Ванька-Каин】の冒険，ポーランド人とトルコ人に対するエカチェリーナ二世【Екатерина II】の戦争，最後にプガチョフ【Пугачёв】の革命を物語ったに過ぎなかった。しかし後の歌にはその中心的な英雄として大ナポレオンが登場した。「かの年月，遠く仏蘭西の地から—名誉のない敵が一人現れた—ナポレオンである。—彼は二十の民族【έθνη】から軍を集めた—ガレー船を物資で満たした—鉛と火薬—そして皇帝に書簡を送った—どうか，アレクサンドル皇帝よ—私のためにテントをモスクワに用意し

てください！—皇帝は青ざめて食卓に座り考え込んだ。—彼の前には一人の将軍がいた。—クトゥゾフ【Кутузов】公である。—恐れてはなりません，アレクサンドル皇帝—招いてやればよろしいのです—彼の食卓には爆弾敷き詰めてやりましょう。—その後には手榴弾を—食後に高い鉄の雨を振舞ってやりましょうぞ！」

ロシアの少女たちはモスクワが焼け，夫たちが戦争に行ってしまうので全ての農民家屋【ίσμπες】が荒れ果ててしまう夢を見た。しかしこれら全ての民衆歌は古いブィリーナとは比較にならない程劣っている。「文明がロシアに入って来て教育が普及するにつれ，叙事詩の精神が消えて行く。」

あらゆるブィリーナに共通の性格として東方の想像力の誇張【την υπερβολή της ανατολίτικης φαντασίας】が挙げられる。「英雄の楔は四十プード（六百四十キログラム）もある。彼の飲む杯は一回り大きなバケツ，馬はとても大きな樫の木より高く，雲よりも少し低いぐらいに跳ぶ。」典型的な形容詞が常に異なるものを結び付けている。大地はいつも「湿って」いて，太陽は「赤く」，海は「穏やか」で葡萄酒は「緑色」で弓は「ピンっと張って」いて，歩みは「速く」，手は「白く」，唇は「甘い」。

英雄はしばしば粗野な農民であり，たくさん食べ，酒を飲み，怒りっぽく，人を殺してしまう。愛【έρωτας】は先祖であり粗野である。「私達の文学 【φιλολογία】の中で叙事詩と呼ばれているものは，ツルゲーネフ【Тургенев】曰く，愛された夫婦を例に出すことは決してありえない。「聖なるロシア」の英雄たちは愛されている。その妻の身に容赦なく暴行を加えることの許される権利を有するだけである。」

その文体はリズミカルで，東方的反復【γραφικές ανατολίτικες επαναλήψεις】が散りばめられている。「あの山，高い山の後ろに，—あの森，黒い森の後ろに，—白き赤光が昇らず，—赤い太陽が昇らない。—平野の上で勇猛な騎乗の英雄が駆ける。—騎乗を駆ける英雄はイリヤ・ムロメツである。」

ブィリーナには全く同一の句で終わるものが存在する。「私達の歌は，凪になるために輝ける海に行き，その者の話を聞くために善きものの所に向かう！」

宗教的民衆詩

ロシア民衆の叙事詩という特徴的なジャンルは，宗教的内容を伴った歌を構成している。ロシアの最初期のキリスト教時代から貧しい—しばしば盲目であった—歌手たち，「カリーカ」【калика】たちが，聖人祭や聖祈祷においてそれを詠唱した。しかしブィリーナがたった一つの場所で詠唱されたのに対し，宗教歌は全ての場所で詠唱された。教会はこの宗教歌を保護し，多くの宗教的賛美が修道士によって作られた。それらの源泉は聖書や聖人生涯，奇跡や秘跡的宗教的伝統であった。時折ブィリーナの英雄たちも登場する。それらの中で最も愛好されたテーマは特にアダムとエヴァ，カインとアベル，キリストの誕生，生涯と受難であった。

貧しい宗教的な吟遊詩人が頻繁に称えた伝統は，素朴な詩作のスタイルにぴったり合っていた。

「キリストが昇天したとき，障碍者と乞食が叫び始めた。嗚呼，我がキリスト，天の皇帝よ，あなたは私達を誰に託そうとなさっているのですか。もはや誰が私達を養ってくれるというのですか。誰が私達に服を与え，誰が私達に寝床を与えてくれるのですか。そして天の皇帝たるキリストが彼らに言った。泣くのをやめよ，私があなたたちに金の山を与えよう！あなたたちはそれを分け，幸せに暮らすようになるだろう。しかし福音記者ヨハネは礼拝しこう言った。金の山が貧者たちにとって何になりましょうか。富者がやって来て彼らを殺し，彼らから金の山を取り上げるでしょう。その時キリストは金の山を消し，彼の名前を与えた。人々に私の名前であなた方が必要な物を求めなさい。人々はそれを与えてくれるだろう！」

聖人たちの中で，このような歌謡で最も称えられたのは大殉教者ゲオルギオス，奇跡を行う偉大な聖ニコライ，そして両親の豊かな家を手放し何年も後に何者だかわからないような，物乞いに戻ってしまった「神の奴隷」アレクシオスである。彼の両親は父の庭の片隅に置き，そこで彼は，両親が失われた一人息子のためにむせび泣いているのを聞いた[3]。「ヴァルラムとヨアサフ」のテーマもまた頻出であり，そこでは脱キリスト教化された仏陀に関するインドの英雄伝説が描写された。

宗教的歌謡は時折極めて美しい抒情的な曲調を持つ。いかに大地がアベルの初めの血を嘆き悲しんだのか，いかに生神女が自身の息子を悲しんだのか，いかに王子ヨアソフが荒地を喜んだのか。

童話

ロシアの民衆の童話への愛は大変大きなものである。叙事詩に対して，—英雄ものにせよ宗教的なものにせよ—民衆はその魂が引き上げられ解放されることを求めたのに対し，童話には空想の楽しみのみを求めた。「歌は真実を言うが，童話は嘘話に過ぎない」とロシアの諺が証言している。

ロシアの童話が「ある日ある時・・・」のような日常的な言葉づかいでもって始まることはない。しかし，「ここから遠く，三倍分離れた九番目の国に，三倍分離れた十番目の王国に・・・」に見られるような言葉遣いでもってロシアの広大な国土を特徴づけている。物語が結婚と喜びで終わっているとき，ユーモア溢れる童話の語り手が付け加えられるものだ。「私だってその場にいたわけでして，酒を振舞われたのです。葡萄酒が私の髭を湿らしただけで口には達しなかったわけでございます。」

ロシアの童話に登場する多くの男女の英雄たちが，ビザンツやタタール，そしてポーランドの童話と共通点を持っている。ロシア精神【τη ρωσική ψυχή】を明らかにしてくれる極めて人気の

[3] Ιδωμενέως 2006: 124 ここでの「聞く」はクレタ方言の γρικώ を指す。辞書形は γροικώ であるが発音は同じである。

あった童話の中には，二人の賢い兄と愚かな三人目でなる「三人兄弟」がある。善良な彼こそが最後には真の英雄になるのだが。

十八世紀から書かれた文学が童話に大きな影響を与えている。多くのフランスの物語がポーランドとセルビアから到達し童話になった。民衆の思考が出版され，多くの学ある人々（カラムジン【Карамзин】，ヘラスコフ【Херасков】，ジュコフスキー【Жуковский】，エカチェリーナ二世）が童話を書き始めた。プーシキン【Пушкин】も同様に，彼の有名な乳母アリーナ・ロディオノヴナの話を聞き書きした。

ロシアの童話は想像力に溢れて，人間の典型【τύπους】が極めて豊富である。しばしば竜が重要な役割を果たす。しかしここで竜は恐ろしい化け物ではない。塔に住み，人間を略奪して喰らうのだが，時々女性に同情し，彼女を愛して半人半竜の子をなしてしまう。とんだユーモアでもって，ロシアの童話は竜がその塔に入って人間の臭いを感じたときに，他の国の童話のように，「人間の肉の臭いがするぞ」，等と言わずに「ロシア人の男ってのはなんて臭いんだ」と言ってしまう。

ロシアの童話は，民衆が動物をとても温かく愛し，極めて正確にその生と習慣をなぞっていることを明らかにしてくれる。しばしば人間は動物と一体化する。女が熊と子供をつくる。腰から上は人間で，腰から下は熊である。熊は愛すべき動物であり，しばしば農民が畑から根っこを引っこ抜くのを手伝ってくれる。

ロシアの童話は決して動物を馬鹿にして語ることはなく，常に飾り気無く尊敬をもって語る。信頼のおける英雄の仲間である，馬というものは驚くべき程一様に表象される。つまり人間にとって最も貴い仲間である。英雄が二股の道に着いたときはいつでも，このような決まり文句を読む。「もし右の道を行けば馬を失うだろう。もし左の道を行けば汝はその命を失うだろう。」英雄たちは馬を失うのを好まず，共に死の危機にさらされることを好むが故に左の道に進む。

靴を履いた雄猫はロシアの童話の中で同じ特徴でもって表象される。樫の木に金の鎖でつながれているのである。右に進むと歌を歌う。左に進むと童話を物語る。愚かな英雄は靴を履いた雄猫に食べ物を持ってくるように要求する。その雄猫は屋根の方へ走り，臭いを嗅ぎ，ソーセージを盗んで彼の所に持ってくる。ソーセージを残らず食べてしまうや否や,「俺は結婚したいんだ！」と叫び始める。しかし雄猫は女性を見繕うことができず，この愚か者は泣き叫んで，また空腹を感じ，この雄猫がまたソーセージを持ってきて，食べ終わって再び同じことを叫び出す，といった始末である。

だが最も愛好されたロシアの童話は「ジャル・プティツァ」【Жар-птица】，火の鳥—神話上の不思議な鳥であり，黄金の翼を持ち夜に輝く。無慈悲な王たちと悪い姑たちが難題として英雄に火の鳥を彼らの所に連れてくるよう要求する。英雄は神聖な美を目にする。それに触れる者は誰でも世界の調和と喜びを理解する力【το χάρισμα】を得るようになる。

抒情的民衆詩と民衆劇

ロシア民衆の抒情詩は叙事詩より更に豊穣である。ロシア人は熱狂的に歌を愛している。労働中にも，休憩中にも，新婦をエスコートするときにも，死者を埋葬するときにも歌を歌う。未だに民衆の唇には，大貴族たち【βογιάρων】の宮廷中で響いていた極めて古い歌が残っている。今でも尚偶像崇拝期の多くの習慣と歌が保存されてはいるが，それは単に後のキリスト教時代に適応させられたものである。偶像崇拝的な多くの神々が今尚保存されキリスト教の名前でもって歌われている。神としてのイリヤが，降誕祭と聖ヨハネの火祭り【στις φωτιές του Άη Γιάννη】において，キリスト教的な仮面で【με χριστιανικό προσωπείο】祝われている。預言者としてイリヤは，山の頂上で祝われるのだが，昔の雷神【Перун】と同一である。多くの偶像崇拝的な悪霊が今尚民衆の想像力の中を彷徨っている。

多くのビザンツの習慣がロシアの民衆の中に根付いている。少女たちがクリドナ【κλήδονα】でやっているように，指輪とリンゴ等を水差しに置き，歌を歌い，一つ一つ指輪とリンゴを取り出し運命【τη μοίρα】を尋ねる。歌謡が指輪とリンゴを取り出した少女たちの運命を明らかにしてくれる。「仕事場から金細工職人が出て来る—鑿を手にとってください。—嗚呼，ねぇ，私のよい金細工師—混じりけのない黄金から—余った金から私に金の指輪を作って下さい。—余った金で針を作ってください。—婚礼の花輪で私は結婚します—その指輪で婚約します。—その針で嫁入り道具を用意します。」

春の歌は全て喜びに満たされている。三月二十五日には多くの農村で少女たちは屋根に上り，「春を叫ぶ。」春に早く太陽と鳥と花を連れてきてくれるように頼む。しばしば春への抒情的な挨拶が劇の形をとることもある。少女たちは二つの組に分かれる。一組目は春を叫ぶ。もう片方の組は春になって答える。復活祭になり民衆たちの豊かで生き生きとした踊り，あらゆる情熱と喜びが始動する。男も女も一緒になって踊るのだが，踊りは彼らにとってしばしば劇の形態をとることがある。愛の狩，女が拒否し逃げ出し，再び戻って来る。男は女を口説き，女を迎え入れる。踊りは喜びの円舞曲に移行する。その周りで観衆がものを打ち鳴らし，リズムを維持しながら踊っている。もっと昔ではただ一人の人が踊り，観客たちは歌謡の繰り返しの部分を維持していく。また時折男と女で別々に分かれて踊って歌うこともあった。

極めて多くの民衆歌は韻【ρίμα】と連【στροφές】，そしてしばしば大きな情熱と痛み，時々からかうようなユーモアを持つ。「嵐が平野にのしかかる。—嗚呼，この家で愛する人を見出せないなんて，なんて苦しいの！—嗚呼，愛する人は馬に乗って行ってしまった—ただ雷だけ—愛する人は雷があれば戻って来るよって言ったのに—でももうこの家に戻ってくることはないんだわ！」

結婚歌は特に惨めなものであった。農村ではいつも十七～十八歳という，男子が兵役に就く少し前に当たる極めて若い年齢で結婚するという習慣があったからである。父親が，彼の下を離れて行ってしまう働き手を花嫁で代替したかったからである。このように少女たちは働き手として見知らぬ家に赴き，彼女の夫は早々に軍隊に取られ，自身に圧制を敷いてくる姑と共に取り残さ

れることになる。歌はしばしば「ガチョウの群れと一緒に生きなければならない哀れな白鳥」として花嫁の運命を嘆く。

「甘い木に—神様は葉をお与えにならなかった—そして私にはかわいそうな若い妻を—幸運にもお与えにならなかった。—私は降りて行き，花嫁は—緑の庭にいる。—私の苦痛と悲しみから—庭は全て枯れてしまい—私の熱い涙で—庭全体が苦しんでいる。—母が私をまじまじと見た—今朝私が教会に行った時に。—私のかわいい娘は—森の中で迷ってしまったんだわ—草むらの中を彷徨ったんだわ—霜[4]でいっぱいじゃない[5]—嗚呼，愛するお母さん—私は森で迷いもしなかったし—草むらの中を彷徨いもしなかったし—霜でいっぱいになったりもしませんでした。—私が失ったのはお母さん—遠い外国の地で—お母さん，私は外国の人々の内で彷徨い歩きました—お母さん，私はいっぱいになりました—私の熱い涙に濡れて。」

花嫁は，結婚式を挙げるその日，朝早く起きて歌いだす。

「朝早く，私は起き上がる—きれいに体を洗って—さわやかな泉から汲んだ水ではなく，—熱い，熱い涙で。—教えてお母さん—もしも今夜も私が眠りにつくことが出来たのなら。—私は，不運な娘っ子—こんな暗闇の夜に瞳を閉じることなんてできないの。—瞳を閉じずに，ずっと考えてる。—なんで，ねぇ，霧に包まれてしまったわ—そして私の心を二つに割ってしまったの！」

花嫁の女友達がやって来て，母親が食卓を整え，少女たちが歌を歌う。花婿の男友達がやって来るが寝室には入らず，入り口で立っている。花嫁が歌い，彼女の男友達に助けに来てくれるように叫ぶ。「敵が私をさらおうとしているわ。—不運な娘っ子—私の村から，家から，私を連れ去るんだわ！」

主に北の領域において，ロシアの葬送歌がより悲劇的になる。親戚たち，そしてしばしば金で雇われた葬送歌の歌い手が歌う。歌は冥府に向かう魂，「山の片側に消えた，輝く太陽」，この大地に残された生者の深い悲しみを描写し，死者に慰めを与える。「スミェールチ」（死）【смерть】という単語は文法性が女性であり，死は女性のように表象される。

「静かに這い寄り，獰猛な女殺人者はやって来た—新妻のように敷居をくぐって—美しい少女のように平野を通って—乞食のように門に寄りかかる—貪欲な女が，穏やかな海からやって来た—もっと向こうの平野から凍った水晶のような女がやってきた。—彼女は門を叩かない—小窓に中に入れてくれなどと頼まない—ゆっくり，中に這い入る—そして漆黒の鴉のように窓から飛び立つ！

夫に先立たれた妻が運命を嘆く。「嗚呼，輝ける太陽が沈んだ—高い山の後ろに沈んだ—黒い森の後ろに消えた—過行く雲の後ろに消えた—輝く星々の後ろに消えた。—私の不安な頭は孤児のように取り残された—私の小さな子供も—今はもう私達は肩に頭陀袋を背負わなければ—一片の

[4] Τζερμιάς 2010: 153　ここでの「霜」はレフカダ方言の πάγρα を指す。カザンザキスは 1915 年にレフカダ島出身の作家で後に袂を分かつことになるアンゲロス・シケリアノスと交友関係を持っており、彼からの影響の可能性が考えられる。

[5] Ιδομενέως 2006: 384　ここでの「いっぱい」はクレタ方言の ολόγρος を指す。つまり一つの句の中に，異なる地方の方言が使用されている。

パンを求めて窓を叩いて回るために。」

驚くべきことに，死ぬべき運命を嘆く歌と軍隊に赴く新兵たちの歌が酷似しているように思われる。何ら喜びも，何ら戦争へのオーガズムも，何ら敵への嫌悪さえもない。ただただ村と愛する人々を捨てることへの深い悲しみがあるだけである。母親が息子にどうしてこんなに突然老いてしまったの，嫁や子供のせいかしら，と尋ねる。そして若者は答える。

「愛しのお母さん[6]。—妻のせいで年老いてしまったわけじゃないんだよ—子供達のせいで年老いてしまったわけじゃないんだよ—母さん，僕は年老いてしまったんだ—年老いてしまった。行かねばならない哀れな者—皇帝の厳しい隷従に入らなければならないんだ！」

職工たち，兵士たちは軍隊に赴くとき，女たちは糸巻きに就くとき，農民たちは労働と宿直に就くときに歌う。最近の世界大戦で大量の民衆歌が生み出され，ロシア精神【η ρωσική ψυχή】が戦争に応えているからである。

「少女たち，自分達だけで遊んでいなさい—僕たちはもう君たちのことを気にしてはいられないんだよ。—恐ろしい時代がのしかかる—私達を戦争に連行するんだ。—僕たち兵士は人間じゃない—少女たちも僕たちをあいしてくれやしないよ。—ドイツ人との戦争に連行させられる。僕たちの戦慄と母親たちが運命を嘆き始める！」

このように村に取り残されてしまった少女たちが歌う。「今宵私たちは集まったけれど，踊ってくれる子たちが誰もいないの—戦争が若い男の子たちをみんな連れて行ってしまったわ—何の言葉も私たちにかけさせないうちに愛するあの子を連れて行ってしまった—会うこともできないうちに連れて行ってしまった・・・—それから手紙が一通届いたの—一つの弾丸が私から彼を奪ったわ—王様，嗚呼，白い皇帝陛下！—どうして私の愛する人を兵隊に呼ばれたのですか。—彼はあんなにも私のことを愛してくれたのに！」

ボリシェビキの後でも農民たちは秘められた，新しい，悲しみに満ちた歌を歌い続けた。「ニコライ【二世】皇帝がいたときは—私達にも家があったさ—同志レーニンがやって来て—その家さえも持って行ってしまったんだ！」新しい体制を称賛し，皇帝や都市民，司祭たちをからかう共産主義者たちによっても多くの新しい歌が作られた。

民衆劇は完全に新しいものであり，現代の生活を反映し，聴衆の必要に適応され，興味深く生き生きした場面や賢い応答，日々生起する特徴的な出来事を持ってきた，書かれた文学的【φιλολογικά】作品から影響を受け，そのような日々の出来事を劇にしている。

踊りと抒情的な歌には既にたくさんの演劇的要素が存在する。中世には「スコモロヒ」が様々な悲喜劇を統合し，祝祭や聖人祭，あるいは大貴族【βογιάρων】の宮廷で演じた。十九世紀には農民，兵士，職工たちが民衆劇から影響を受け，娯楽のために報酬をもらって全作品を演じた。ドストエフスキー【Достоéвский】は，囚人たちからシベリアでこのような演劇の上演を見るこ

[6] Ιδομενέως 2006: 213 ここでの「愛しのお母さん」はクレタ方言の Κερά を指す。

とになり，このような民衆の作品の持つ価値に気付かされた。既に述べたように，昔から世代ごとに引き継がれてきた民衆の演劇作品が数多く存在している。これらの基礎は常に同じであるが，細かい所は場所と演出によって変化していき，新しい舞台を加え，他のものを削除し，俳優と作家たちは一つの目的を置いていた。つまり公衆の興味を刺激することである。

西ヨーロッパからロシアに，人形劇—「ペトルーシュカ」【петрушка】—ロシア民衆に最も愛されたカラギョジス【καραγκιόζη】のようなものが入って来た。全ての村で，聖人祭のときはいつでも人形劇が催され，全ての祝祭で農民【μουζίκοι】たちがペトルーシュカの喜劇的な冒険の空想に耽った。舞台は，ほぼそっくりそのまま常に同じものの繰り返しであった。ペトルーシュカがジプシーたちから馬を買い，乗ってみるが落馬する。助けを求めて叫ぶが，祭りの最中で，うまく骨接ぎをしてくれなかったので，ペトルーシュカの脚は悪くなってしまった。

ウクライナでは十七世紀の学校演劇の影響で，洞穴でのキリストの誕生を表した著名な民衆劇「ヴェルテプ」（洞窟）【вертеп】が生まれた。十七世紀にはキエフの後継者たちが降誕祭に家から家へと巡りキリスト誕生劇を演じた。民衆はそこにヒント (την ιδέα) を得，木の板と布で二つの床を備えた仮設の舞台を作った。上部の床は，キリスト，生神女，ヨセフ，羊飼いたちといった主要人物が囲む神々しい飼葉桶である。周りは魔法にでもかけられたように常に動かない。下部の床であらゆる裏方が行われる！ベルを鳴らし，上部の床に明かりを灯す等，下部の床で劇が始まる。天使たちが羊飼いたちの下に来て，ヘロデ王が現れ，三博士の場面，嬰児殺しが行われる。死が訪れヘロデの首が切られ，悪魔が彼の身体を奪って地獄に投げ込む。

宗教劇の後で喜劇が演じられる。男らしいコサックがペトルーシュカの役を演じ，ポーランド人とジプシーそしてカトリックの神父たちを挑発して侮辱する。

第三章

中世ロシアにおける古典文学的生産 (Λόγια φιλολογική παραγωγή)

キリスト教の導入からタタールの侵入まで (988-1240)

ロシアにおけるキリスト教と教会スラヴ語の導入に伴って，宗教的なものばかりではなく，世俗的な内容を持った多くのビザンツの著作が翻訳された。教会の説教，聖人たちの生涯，年代記，自然学者，アレクサンドロス大王の民衆物語やトロイ戦争のものまであった。しかし【教会】スラヴ語が民衆には理解できなかったので，翻訳者たちが話し言葉から語句を挿入した。このように少しずつ，次第に話し言葉が優勢になっていくが，混合言語が生み出され，十八世紀初頭まで筆記された。

初めの二世紀（十一世紀と十二世紀）には，学習への渇望が余りにも大きかったので，翻訳された全ての著作が速やかに民衆に教えられ，五百年の間聖なる伝統のようにみなされていた。

私たちの下に保存されているロシアの最古の写本は，ノヴゴロドの裕福な領主であるオストロミール【Остромир】のためにグリゴーリーなる輔祭によって書かれたオストロミールの福音書(1056-1057)【Остромирово Евангелие】である。この写本は，ビザンツの先例にならい精密画と見事な大文字書体で装飾されている。

「イズボルニキ」（コレクション）【изборники】の写本は少しばかり新しいものである。これはチェルニゴフのスヴャトスラフ公【Святослав】のためにビザンツの本から訳された。その内容は多岐に渡る。教会の司祭たちの分裂，神学研究，聖人伝，アウグストゥスからコンスタンティノスまでのローマ皇帝の年代記等。同様にその家族全員と共にスヴャトスラフの写本を装飾している絵【η εικόνα】もまた興味深い。これは今日まで伝わっているロシアで初めての肖像画である。

しかし正典と一緒に，外典が—同じく福音書であり聖人伝であるが—入り込み，速やかに民衆が好んで読むところのものとなった。教会はこれらを迫害し禁止したが，童話のように極めて豊かな想像力でもって書かれ，また正典が答えを与えてくれなかった多くの疑問に回答を与えたので，農民たちはこれらを愛好し続けた。

アダムとエヴァについて，ソロモンとシェバの女王について，キリストの子供時代，地獄と天国について語っていた。農民たち【μουζίκους】には主に「罪人たちの救い」が最も愛好されたものであった。大天使ミカエルが生神女を冥府へと導き，様々な地獄に落とされた人々を見せる。恐ろしい程ありありと罪人たちの証言が描写される。生神女は震えあがり，悲嘆と同情に駆られ，神の玉座の前に出て叫ぶ。「私に「祝福されたマリアよ」とよき知らせをもたらした大天使ガブリエルはどこにいるのです。どこにいるのですか。ここに姿を見せず，憐れみを示してはくれないのですか。天の玉座の奴隷たちはどこにいるのです。神学者ヨハネはどこにいるのです。なぜ私と一緒に跪き，罪深いキリスト者たちの弁護【παρακαλέσει】をしに来ないのですか。私が不運な

罪人たちのために嘆き悲しんでいるのが見えないのですか。全ての天使たち，この天に住まう者は出てきなさい，御国に相応しい者たちは全て出てきなさい。さぁ地獄に落とされた者たちのために祈りましょう！跪き，神に嘆願しましょう。神が全ての罪人たちに憐れみを与えてくださる前に，私たちはこの身を起こさないようにしましょう！」

ディゲネス・アクリタス【Διγενής Ακρίτας】のビザンツの叙事詩もロシアの民衆に大いに普及した。しかし彼らはその形を変え，名称と場所を混同し，ビザンツの伝統の宗教的性格を余りにも強調した。

ロシアの学者たちは少しずつビザンツの原典を複写するのではなく，模倣し，彼らもロシアの聖人伝を書き，宗教的講話を編み始め，彼らの歴史年代記を書こうと試みた。

このようなあらゆる努力によってネストル (1054-1114) 年代記【Повесть временных лет】は優れた地位を手に入れた。『古い時代の歴史，どこからロシア民族【έθνος】が起こり，誰が初めにキエフを統治し，ロシア民族【έθνος】はどうなってしまったのか』。この年代史家はビザンツ人たちのように大洪水からその物語を始め，スラヴ人達がヤフェトの子孫であることを示そうと努力した。ロシアに初めて居住した民族【φυλές】と彼らの未開【βάρβαρα】の風習を記述した。使徒アンドレが初めに福音を述べ伝えにやって来て，ある丘に十字架を掲げ，後にそこにキエフを建て，まさにこの丘からある日全世界に光が行き渡ると預言した。使徒はスラヴ民衆たちの未開【βάρβαρα】の習慣，とりわけ彼らが行っていた温泉での入浴に驚いた。湯で体を洗い，彼らを無慈悲に打ち付け，それから冷水に投げ込んで生気をつけさせる，といったものである。「誰も彼らに強制はしなかったが，日常的な責苦であり，こう言われていた。入浴！」

ネストルは神と祖国への信仰を深いレベルで同一化した。どの国にも天使の番人がいるものだが，ロシアを護る天使の翼は巨大なものだと信じていた。彼の年代記にはたくさんの詩がある。聖オリガについてこう語っている。「キリスト者の中で明けの明星のように輝いた。甘美な光に身を投じた。夜の月のように不信者の上に光を照らしていた。今やロシアの天に上り，神にロシアの息子たちのために祈りを捧げている！」

この年代史家はしばしばかくも臨場感にあふれた叙述をしたので，ヴィリーナから多くの素材を取っていたことは確実であろう。オレーグ公に，彼は自分の馬に殺されるだろうと預言するものがあった。オレーグはすぐに馬を遠くに追放した。何年か経った後，馬が死んでしまったことを知った。彼は喜び，偽預言者をあざ笑い，彼の下に馬の骨を持ってきてその目で見るように命令した。笑って馬の骨をまじまじと見ていたが，突然馬の頭蓋骨から蛇が飛び出して噛みついた。オレーグは恐ろしい痛みと共に息絶えた。

素朴且つ大胆に，ネストルはロシアにキリスト教が到来したこと，キュリロスとメトディオスが福音を伝えたこと，聖ウラジーミルがキリスト者になる前に全ての国で神を礼拝しているのかを確かめ選択するために，全ての国に使者を派遣したことを記述した。使者たちは熱気に満たされてビザンツから帰還し，唯一の真なる宗教はキリスト教であると告白した。ムスリムの国に派遣された使者たちはムハンマドの宗教について彼に詳述した。しかしウラジーミルがメッカの預

言者が信者たちに飲酒を禁じていたことを聞くや否や，叫んだ。「ムハンマドの宗教は受け入れらない。ロシアの民衆は飲酒に大いなる喜びを感じているからだ！」

この時代の最も有名な文学的創造の一つに，ウラジーミル・モノマフ (1053-1125)【Владимир Мономах】の，彼の息子達への『箴言』が挙げられる。聖ウラジーミルのひ孫のウラジーミルは，タタール以前の時代の公国の，最も聡明であり，最も重要な人物であった。この王は他の公たちと一緒に，大変な苦労をして何とか和平を結ぼうとした集まりから戻った。使者たちが来てスモレンスクの公を攻撃し覇権を確立すべきだ，と進言した。しかし彼はこの使者たちを退け，ただ一人残されてしまったことを悲しみ，詩編讃頌と読書で時を過ごした。

当時彼は息子達たちのために助言をしようと閃いた。公の義務を詳述したが，それは民衆たちを治め幸せにするための遠大な使命であった。長々と続くのだが，箴言集はまた以下のような始まりを見せる。「一致しなさい，愛し合いなさい，平和でいなさい，善良でありなさい。活力を保ち，他人を信用せず，あなたたち自身で各々業をなしなさい。私の使用人が出来るであろうことは私が一人で行ったものだ—戦においても狩においても，夜も昼も，猛暑にも厳冬にも私は決して静寂を喜ばなかった。」しばしば戦と狩での詩人の勇敢さについて語ったが，決して法螺を吹くことはなかった。全てを神に帰した。「私を私たらしめたのは御神であり，虫けらに等しき身なれど，人間のどの業をも十分行える。」

ダニイル師父 (Αβά Δανιήλ) の聖なる地での祈りに関する物語も大いに流布していた（十二世紀)。ダニイルは敬虔で教養があったが，鮮やかで詳細に十字軍の手にあったエルサレムを描いた。しばしば正教徒でありロシア人であるという彼の誇りを伝えている。ネストルやウラジーミル・モノマフのように，ダニイルもロシアの民衆やロシアをこのように遠大な使命をもった一つの総体として感じていた。

この深い民族 (εθνική) 意識の概念は，タタール以前の時代唯一の叙事詩，『イーゴリ遠征物語』【Слово о полку Игореве】の詩人を獲得した（十二世紀)。1183 年にスヴャトスラフ大公は他の多くの諸侯たちと共にポロヴェツ人【Половци】に対し戦争をしかけ，彼らを打ち負かしコンチャーク・ハーンを捕虜にした。スヴャトスラフの二人のいとこであるイーゴリとフセヴォロドはこの戦争で領地を得られず，王の受けた栄光をねたんだ。彼らも同じ勇猛さによって栄光を受けられるように懇願した。二人の兄弟はモンゴルに対し遠征に出かけ (1185)，彼らと共にイーゴリの息子ウラジーミルと甥のスヴャトスラフも同行した。戦闘が始まり，太陽にやられてしまったが，二人の英雄は震えることがなかった。一回目の衝突では，力ずくで敵に打ち勝った。敗者たちは部隊を再編し，二度に渡る恐ろしい戦闘を仕掛け，ロシア人達は最終的に打ち負かされた。イーゴリは多くの仲間の諸侯たちと共に捕虜にされてしまった。イーゴリは，何度も冒険した後で，脱走に成功した。息子のウラジーミルもハーンの娘も共に逃げ出し，彼女は洗礼を受けキリスト者になった。

叙事詩はブィリーナと多くの類似点を持っているが，民衆的なものではない。叙事詩は限られた個人の，しかも教養のある者の作品であり，ビザンツ文学【βυζαντινή φιλοολογία】の翻訳を可

能な限りよく研究し，また諸侯の家族についてよく知っていた。彼はロシア民族【του ρωσικού έθινους】の一体性を深く感じており，イーゴリを救えず，「聖なるロシア」を信じない者たちを迫害しなかったスラヴ人諸侯たちを弾劾した。戦闘の生き生きとした正確な描写，誇りと率直さは，この詩人がおそらくは貴族であり，しばしば戦の中で重要な地位を占めていたことを明らかにしてくれる。

この叙事詩は調子のある散文で書かれ，しばしば詩的な力を備え，また大胆な絵がついている。戦争の虐殺と結婚式での饗宴を比較することもある。「ロシア人男性たちが卓を設ける—婚礼の招待客たちが飲み食いする—それから大地に寝そべった—祖国のために。草は不満を垂れ，木は苦痛と共に地に伏す。」私達の十八世紀の詩人たちには，プーシキン曰く，イーゴリの韻律を創造する力だけではなく，それを感じ取る力もなかったのだ。

イーゴリの妻であるヤロスラヴァの悲嘆もかなり感動的であった。ヤロスラヴァは朝早くにプチーヴリの桟橋の上で運命を嘆いていた。「私は鷗のようにドナウの波に飛び込むでしょう。私のフェルトの袖をカヤール川で濡らすのでしょう。私の主人の傷を，竜の身体についた血を洗いましょう。」

ヤロスラヴァは朝早くにプチーヴリの桟橋の上で運命を嘆いていた。「栄光のドニエプルよ！私の夫を連れてきて！私の太陽，大いに輝く私の太陽【τρισήλιε μου】よ，あなたは私達の全てを愛しています。私達の全てにあなたは火をつけます。—我が主人よ，どうしてあなたは私の夫にこんなにも熱い日光を投げかけるのですか。どうして渇きで私の夫を虐げるのです。もうその背に矢筒を背負うことさえできないではありませんか。」この詩の全ての性質は，主人公【ηρώων】たちの苦しみと喜びに共感している点である。イーゴリがその鎖を断って祖国に帰りついたとき，鳥は喜んでさえずり，燕は飛び立ち，太陽は輝きながら昇り，川全体が帰還する英雄たちを喜んで運んだ。

タタールの圧制 (1240-1462)

恐ろしいタタールの侵攻とキエフの荒廃はロシアの初期の精神的解放を中断させた。この国は再び暗黒と狂乱，そして無知に陥った。あらゆる精神的運動はもはや修道院の中だけに限定された。民衆の中ではごくわずかな者たちだけが教養を身につけ，多くの王子たちや大貴族たち【βογιάροι】は読み書きができなかった。ビザンツとの交流は途絶えた。ビザンツの学者たちが訪れることもなく，またギリシア語著作の若い翻訳者たちも現れなくなってしまった。ロシアの精神的宝庫としてただ古い作品だけが残った。そしてこれらの作品は，極めて頭の固い方法で解釈され，迷信と無知の源泉となった。

ウラジーミルの主教セラピオン【Серапион Владимирский】は，説教の中で (1215) ロシアの荒廃と消え失せた精神を嘆き悲しんだ。彼はその全てを無実の民衆たちのせいにした。『嘆き』から今でも抜粋が保存されている。はじめ，タタール人が侵入する前，詩人はロシアの地の美しさ，

諸都市の隆盛，そして領主たちの富を称賛し，ウラジーミル・モノマフへの暖かい讃頌を編んでいた。「嗚呼, なんと光り輝く, 五つの形を持つロシアの大地！汝の富はなんたる奇跡であろうか！湖，川，泉，山に丘，密林に実り豊かな畑，たくさんの種の鳥や動物，大きな街々，輝かしき教会，宮殿，厳格な諸侯たち，名誉ある大貴族たち【βογιάροι】選ばれし勇敢な男たち！汝はなんと豊かなのだ，嗚呼，ロシアの大地よ，嗚呼，真のキリスト教の大地よ！」

モナ・ヴァナ【Monna Vanna】の言い伝えと余りにも酷似しているリャザンのエヴプラクシス王女【Евпраксия Рязанская】の言い伝えもこの時期に属している。例えば聖メルクリオス【Ο Άγιος Μερκούριος】のような，他の言い伝えにおいて，ロシアの大地は感動的に嘆き悲しみ，その子供達に別れを告げた。「嗚呼，我が子達よ，どうしてお前達と別れられようか！やつらは私の胸からお前達を攫い，お前達は奴隷として不信者どもの手に堕してしまう。私はやもめになり，私の修道院，私の教会，私の街々は荒れ果ててしまった！もう苦痛に耐えきれず，神に叫びを上げた。『嗚呼，主よ。あなたこそ全てを造られ，全てを治めておられます。あなたの民衆の苦難に目をかけてください。あなたの怒りを和らげてください！』」

15 世紀頃，初めてロシアがタタールに対し勝利するようになると共に，卑屈なイーゴリの叙事詩の模倣ではあるが，初期の新しい英雄歌を目にするようになる。当時トヴェーリ出身の商人であるアファナーシー・ニキーチン【Афанасий Никитин】の興味深い物語『三つの海の彼方への旅』【Хождение за три моря】が書かれた。これはまさに何ら宗教的な性格を持たないロシア旅行記の叙述である。ニキーチンはインドまで (1466-72) もっぱら商業的な目的で旅した。タタール人達が彼を捕虜としたが，脱走し，ペルシャを通ってインドのヴィダル，今日のハイデラバードにまで到達した。七年後にロシアに帰国したが，故郷のトヴェーリを見るには至らず，スモレンスクで死去した。ニキーチンは真面目で現実的な商人で，彼が通った様々な国々が商品としてロシアと何を交易できるかを見出そうと努めた。彼の記述は生き生きとしたものであり，かつ正確だと考えられている。しかし敬虔な人でもあり，異なる信仰を持つ人々の中でキリスト教に必須の責務をなおざりにすることに対して絶えず不満を口にしていた。

このようなタタールの軛の暗黒時代を通して，ロシアはいかなる価値のある文学作品を表すことがなかった。反対にこの国は未開状態【βαρβαρότητα】に逆行し，ロシアの特徴に対するタタール人の影響は大きく壊滅的なものであった—非人間性，残忍さ，略奪への愛。北方にただ一つ窓が開かれていた—ノヴゴロドである。そこではタタール人のクヌート【кнут】とはあまりにもかけ離れている，商人たちの自由を愛するこの民主主義が，今尚西方世界との現在的な接触を保持しているのである。しかし「全ロシアの主」たるモスクワっ子，イヴァン三世が急速に暴力でもってこれを服従させて (1479) 壊滅させ，そしてモスクワに市民達を評議会に召集する大きな鐘を移した。

タタール人たちは衰えるか同化されるか追放されるかしたが，もはやロシアの中心はモスクワに移行してしまったのである。

モスクワによる統治 (十五世紀-1700)

イヴァン三世の妻でパレオロゴス家のソフィヤ【Ζωή Παλαιολογίνα / София Фоминична Палеолог】と共に，帝都の陥落後特にイタリアへと散ってしまった多くのビザンツの学者たちがモスクワにやって来た。彼女と共に多くのイタリア人の学者，技術者，建築家がやって来た。「第三のローマ」はビザンツにとって代わり，キリスト教世界の中心になる野心を露わにした。

クレムリンが建てられ，宮殿と教会が建築された。ロシアの軍隊はしばしば新しいシステムで武装した—武器職人，教練教官，技術者がイタリアとドイツそしてポーランドからやって来た。新しい商業路が開け，商人たちも到来した。西欧人【οι Φράγκοι】たちが受け入れられ，モスクワの富国強兵に欠くことができない存在だとみなされていた。しかし正教徒であるモスクワ人は彼らを不信と嫌悪の眼差しで見ていた。

ギリシアの学者たちと共に，モスクワに極めて著名な人物である，高名なマクシモス・オ・エリナス (1480-1556)【Μάξιμος ο Γραικός / Максим Грек】が到着した。マクシモスはアルタで生まれパリ，ヴェネツィアそしてフィレンツェで教育を受け，フィレンツェではサヴォナローラ【Girolamo Savonarola】にも聴講した。最終的には聖アトス山のヴァトペディオス修道院の静寂に身を落ち着けた。モスクワ大公は世界総主教に民衆の啓蒙のために高い教養をもった学者を一人寄越すように求めた。総主教はマクシモスを指名し，1518 年この有名な修道士は大いなる栄誉をもってモスクワに歓待された。彼はすぐに困難な仕事にとりかかった。ビザンツからの避難者たちが持ち込んだギリシア語の写本を分類し，新しい翻訳を作り，古い翻訳を修正し始めた。ロシアを救済し確かな勝利を与える唯一の武器は深い教養である，と主張した。しかしここで言う教養は書かれていることに賛同しなければならないというものではなく，書き手たちの精神に賛同することであった。

マクシモスは大胆な思考の持ち主で，表現において恐れることがなかった。彼の指導の下多くの助手が働いたが，大半は頭が固く迷信深かった。マクシモスはすぐに異端者として断罪され，キエフの聖トリアーダ修道院に追放された (1525) 。彼は上位聖職者の態度を激しく非難し，大公の二度目の結婚にも異を唱えた。故郷に帰らせてくれるよう要請したが，次のような返答があった。「あなたは聡明な方であり，我々が悪事を行っていることを知っており，またロシアから離れるときはこのことを全世界に広めてまわるに違いない。」

マクシモスが迷信と無学に対して，そして聖職者と修道士の麻痺した習慣に対して行ったことはロシアのこのような新たなる再生【τη νέα τούτη αναγέννηση】に大きな影響を与えた。マクシモスはロシアの民衆を啓蒙し精神的指導者たちの水準を高めるという野心を持って学校を設立した。この時代の最良のロシア人たちはこの偉大なギリシア人改革者の弟子であり，信奉者であった。

ロシア民衆の宗教的，習俗的そして社会的状況に関して豊かな情報を提供してくれる，十五世紀で最も重要な書き物上の記念碑は，最上の者の中でも有名な『ドモストロイ』【Домострой】—家庭法典である。六十三の章でキリスト者家長の責務の全てを概観している—である。日々の生

活としていかにして「聖三一」を信ずるべきか。どうやって洋服を裁断し，継をあてるのか。ここから，美味なビールを作るものとしてどうやって子供たちを養い，その妻に従順を教えるか。

毎晩家長は，聖イコンの備えられた部屋に，召使たちと共に家族全員を呼び，「明瞭かつ声を合わせて」全員で夕べの祈りをしなければならない。祈りの後，あなたは飲み食いを許されず，話すことも許されないのだ。すぐに寝なければならない。真夜中には静かに身を起こし，罪人たちがあなたの故に赦されるように悔い改めなければならない。

妻は家の全ての責任を引き受ける。病気のときや夫の許可があったとき以外は絶えず働かなければならない。もし不従順であるならば，毎朝夫の命令を受け，夫はクヌートで彼女を打たなければならないが，皆の前で行う必要はない。彼女が再び穏やかに振舞うことができるように打てばすぐに，彼女を打つと共に訓戒しなければならない。しかし決して顔を殴打してはならず，心臓をこぶしで殴ってもならず，また足で踏みつけてはならない。また彼女を棒や鉄で殴ってはならない。なぜなら耳が聞こえなくなって，目が見えなくなり，足や手を切断することになり，頭痛や歯痛に陥る可能性があるからである。「ただクヌートだけで彼女を打ち，休まず打ちながら彼女が訓戒を聞き入れるようにしなさい。クヌートは痛みを伴うと共に健康によい。あなたはいつも他のものたちがこの様を見聞きしないように祈りなさい。」

教育方法に関する理想は子供たちにも要求された。「決して子供を打つに際し疲れてはならない。木で子供は死ぬことはなく，子供を力強くするだろう。肉体は罰するが，魂を救うことになる。」他にも，「あなたは決して笑ってはならず，子供に対し冗談を口にしてはならない。なぜなら今の小さい時分から軟弱者にしてしまうなら，後にあなたはもっと大きな忍耐を被る羽目になるだろう。」

家政に関しては，実用的で手短だが，耐え切れない程に自己中心的な助言を与えている。不要となったものでも浪費してはならない。節約しなさい。貧しい人々に，彼らが無駄遣いしてしまったもので，あなたにとって不必要なものを与えなさい。誰かを歓待するときには，大いに節約しなさい。そして葡萄酒を量り，注いで召使に飲ませてはならない。」

十六世紀のロシア人著作家の中で最も興味深い人物の中に，まさにかの雷帝イヴァンがいる。気まぐれで，自家撞着的で，冷酷であるだけでなく神を畏敬し，大胆な幻想を抱き，技芸書を愛好した。アンドレイ・クルプスキー公【Андрей Курбский】と白海に面するキュリロス修道院の典院に宛てた書簡の中で，彼の野蛮な性格故の矛盾が反映されている。雷帝イヴァンは全く裸の自我の覆いを取った初めてのロシア人作家である。この書簡の中では皮肉，狡知，通俗性，奔放な侮辱，博識がさく裂している。聖書，教父，年代記，独善的な自分の思考に多くの論拠を持った詭弁を駆使した。

彼は熱狂的に自身の使命を喧伝した。この地における神の代理，絶対君主，その崇高な目的に達するために，あらゆることに彼の許可が必要である。東方と西方を治めるために選ばれたローマとビザンツの玉座の後継者である。イヴァンは，西方をゆくゆくは手中に収めるために，そこから最新の技術的手段を得るために西方世界との接触を求めるようになった。

アンドレイ・クルプスキーはマクシモス・オ・エリナスのもとで教養を得た弟子であり，イヴァンの有能な将軍であった。しかし皇帝は彼が自身に対し陰謀をたくらんでいるのではないかと疑い，クルプスキーはポーランドに避難した。そこから皇帝に対して書簡を送り，彼を神の罰でもって脅迫した。というのも，皇帝が無責任に彼を迫害し，大貴族たち【βογιάρους】を殺害したからである。「私は，彼はこう書いている，後の世にいらっしゃる神の御前でもあなたを告発するために，墓でもこの手紙の写しを持って行く所存です。」

イヴァンは，自身が臣民の生と死の権利をもっていることを援用しながら，長々と彼に書いて応えた。無数の宗教的格言を通して，この皇帝の手紙の中で明らかな力強さを持って，とりわけ大貴族たち【βογιάρους】に忍耐していた子供時代のイヴァンの個人的な記憶が鮮明なものにされた。「どれほど裸と苦痛に忍耐したことか！一つの記憶が脳裏を離れない。子供時代の遊びの中で，イヴァン・ヴァシリエヴィチ・シュイスキー王子が玉座に座って肘を載せ，私達の父親に足を向けて横になった。やつらがどれほど私達の祖先の遺産を奪ったことか！父や祖父の数え切れないほどの財物を奪って溶かし，金銀の容器を作って，あたかも自分達の祖先の財産であるかのようにやつらの名前を書き込んだのだ・・・」

イヴァンの統治をミハイル・ロマノフの皇帝としての選出 (1613) で終わった無秩序な時代は継承している。彼は秩序を課し，常備軍設立の必要性とそれが西方の方式だけで組織できるはずだと感じていた。絶えずロシアにはヨーロッパ化の多大なる必要性があった。

この時代の無知と未開【βαρβαρότητας】に対する極めて鋭い批評家の中にモスクワの外務の上級官吏であったグリゴーリー・コトシーヒン【Григорий Котошихин】がいた。彼は背任者として告発されストックホルムに亡命した。その地で，数多くの興味深い中傷文章を書いたが，その中で鮮明にロシアの精神的，社会的な悲惨さを詳述した。「ロシア人は，自分たちの起源について誇りを抱いているが，どんな事業をも達成する力がない。自惚れが強く，恥知らずで，嘘つきである。玉座の助言者たる大貴族たち【βογιάροι】は敢えて皇帝に反対する勇気もなく，ただ長い髭を伸ばして座っているだけでその大部分は自分の名前すら書けない。宮廷での皇帝と娘たちの生活は神が人間に対しお喜びになるものとはかけ離れている。皇帝に戴冠した母都市は聖なる終局の瞬間に彼を戒められるだろう。—それでも軽い罰ですが，あなたがあなたの杖で罰するのに皇帝が何も誤っていないものか！」

同じぐらい手厳しく，東西の教会と全スラヴ人を統合するという大きな目的を持って 1659 年にモスクワにやって来たクロアチア人のユーライ・クリジャニッチ【Juraj Križanić】も当時のロシアの状況を詳述している。このような試みは，彼はコトシーヒンの中傷よりも全うなことを書き，私達に当時のロシアの状況を克明にしてくれるものであったが故に，十二年間シベリアに流刑にされる原因となったが，当地でラテン語とクロアチア語とロシア語の混ざった言葉で種々の貴重な作品を著した。クリジャニッチの主張によると，ロシアはスラヴ人にとっての唯一の希望である。しかし速やかに西方の文明から教養を吸収し啓蒙されねばならなかった。

同時代に，かつてマクシモスが虚しくも主張し失敗した，正典と典礼書の有名な修正が起こっ

た。主教ニコン【Патриарх Никон】は抜本的で大胆にこれを遂行した (1654-56) 。文章の改訂のため主にウクライナの教養ある聖職者が招聘された。モスクワ人達は，ウクライナ人達がラテン化を進めに来たのではないかと思い，彼らを不信の目で見ていた。しかしわずか数年で彼らは学校を建設し (1682) ，速やかに「スラヴ・ギリシア・ラテン学院」となった。イエズス会の体制に則って修辞学と弁論学が教えられ，聖書物語なるものが作られ，学生たちが宗教的な劇を演じていた。

大会議 (1656) と同時に，聖書の迷信と曲解が追放された。しかし何千もの信徒たちが「刷新」を受け入れず，公式の教会から離脱した。証人的で英雄的な「分裂派」（ラスコーリニキ）【раскольники】や「古信仰派」（スタロベリ）【староверство】が結成された。多くのものがロシアやシベリアの北方の見知らぬ荒れ地に追放されたり，火刑に処されたりしたが，当地で植民市を建設し，多くの民衆歌のように彼らの古い習慣を守った。

これら最も熱狂的な者達の中で最強硬派の人物に 1682 年に火刑に処されたアヴァクム【Аввакум】がいた。ロシア文学の身の毛のよだつような記念碑として彼の自伝が存在する。アヴァクムは偉大な教会の弁論家であった。モスクワで力強く大胆に民衆の言葉で説教した。二つの指ではなく三つの指で十字を切るのを主張していた主教ニコンと激しく論争した。「冬が巡り，アヴァクムが説教して曰く，我々の心は凍り付くだろう！」彼はパンも水もないくらい牢に投げ入れられた。そして妻子と共にシベリアに流された。水晶のように凍てついた荒れ野を妻と手を取り合って歩いて進んだ。「我々は飢えて乾き，不幸な妻が不平をもらしている。—まだまだこの【苦難の】証しは続くのでしょうか。私も妻に答えた。—マルコヴナよ，死ぬまで！その時，哀れな娘がため息をつき私に言った。—その通りです，ペトロヴィチ。じゃぁ，もっと早く走りましょう！」

しかし西方からの影響はロシアでますます大きくなった。ウクライナ人たちが既に学校に新しい方法論をもたらし，外国人商人たちでモスクワはいっぱいになり，ドイツ人，スウェーデン人，ギリシア人，セルビア人，ポーランド人の外国人志願兵もいた。新しい習慣も入り込んだ。伝統の全能性が崩壊し始めた。モスクワには主にドイツ人やポーランド人等の西欧人【φράγκους】 で溢れかえっていた。

服飾や生活様式を模倣する者も表れ始め，若者たちはポーランドのものを競って身に纏い， 男たちは西欧の習慣【τη φράγκικη συνήθεια】に従って髭を剃り，大貴族たち【οι βογιάροι】は当時までは馬か箱状の馬車でだけ移動していたが，ポーランドの馬車に西方風の制服を着た従者を同行させて移動するようになった。

宮廷もまた流行に追随した。服飾が変化し始め，家具を新調し，鏡が入り，長椅子がポーランドの安楽椅子にとって代わられた。皇帝の玉座も 1659 年にポーランドを範とするものに取り換えられた。

最後に大きな刷新があった！皇帝アレクセイ・ミハイロヴィチが演劇に大きな関心を寄せ始めた。後継者ピョートルの誕生（1672 年 6 月 4 日）の六日後に，宗教的作品の舞台に上がった経験

のあった，モスクワのドイツ系福音主義プロテスタント会の牧師ヨハン・ゴットフリート【Johann Gottfried】に，エステルの物語を上演するように命じた。皇帝は劇場を造らせ，この牧師は 1672 年十月にモスクワのドイツ人区の六十二人と共に移動して新しい劇を演じるために行った。しかし上演の始まる前に皇帝は罪を恐れ，彼の宗教顧問に助言を求めた。幸運なことに宗教顧問は彼を宥め，ビザンツの偉大なキリスト教皇帝たちが極めて演劇を愛好したのだから，劇場に赴くことは罪にはならないということを確信させた。

上演は十時間続き，皇帝を余りにも熱中させてこの牧師に「皇帝陛下の俳優たち」となるためにロシア人にも教えるように命令させるまでになった。このようにしてモスクワでも初の演劇学校が創設され，二十六人の中産階級【μικροαστοί】と労働者【υπάλληλοι】がそこに息子たちを送り込むように命令された。多くの親たちが断腸の思いで服従し，子供たちを「サタンの学校」に送り込んだ。ゴッドフリートもロシア人俳優たちと協力し多くの作品を起こした。ユーディトとオロフェルニ，ヨセフ，タメルラノ等。皇后は娘たちと共に劇場に赴いたが，観覧席で鳥かごの中に閉じこもってしまった。

上演された作品にもちろん詩的な価値はない。しかし【上演されたという】出来事自体がロシアの精神的な発展にとって重要である。ロシアを西方文明によって近代化する必要性が抑えがたくなったのである。文明化され始めていた集団は少数で，未だ宗教的な小雑誌でもっても，「スコモロヒ」の素朴で荒削りの歌でもっても，十分な力を持ち得なかった。とりわけ騎士の童話のような軽い文学【ελαφρής φιλολογίας】が書き始められたり翻訳され始められたりもした。教養をもったロシア人たちは騎士の勇敢さや純真な英雄,そして奇妙な西方の習慣を深く考えずに読んだ。これらの作品が印刷されることはなかった。モスクワに建設された印刷所 (1553) は宗教的な作品とまれに政府関係の文書以外は印刷することが許されていなかったのである。これら全ての童話は手書きで流通していたが，早くも十八世紀には印刷され始めた。このような西方の軽い文学【η ελαφρή τούτη φιλολογία της Δύσης】はロシア民衆の想像力を掻き立て，多くの者たちが，十七世紀頃は，まだ違法で単なる完全な模倣でしかなかったが，宗教や恋愛の内容をもった作品や聖人の生涯，そして空想の騎士冒険譚が書かれた。

＊謝辞
ロシアの人名や地名、及び書名などに関する日本語表記及びキリル文字表記に関しては、東京大学大学院文学研究科の横江智哉氏に助力いただいた。ここに感謝の意を表明する。本研究は科研費 201601010228292540 の成果の一部である。

参考文献[7]

ΙΔΟΜΕΝΕΩΣ Μαρίνος, (2006) *Κρητικό Γλωσσάριο*, Ηράκλειο: Βικελαία δημοτική Βιβλιοθήκη.

[7] 原著では参考文献は挙げられておらず、ここで示したのは訳注時に利用した参考文献である。

ΙΔΟΜΕΝΕΩΣ Μαρίνος, (2013) *Κρητικό Γλωσσάριο Β΄Τόμος νέος συμπληρωματικός*, Ηράκλειο: Βικελαία δημοτική Βιβλιοθήκη.

ΚΑΖΑΝΤΖΑΚΗΣ, Νίκος (1999) *Ιστορία της ρωσηκής λογοτεχνίας*, Αθήνα: Εκδοσεις Καζαντζάκη.

ΤΖΕΡΜΙΑΣ, Παύλος (2010) Ο Πολιτικός Νίκος Καζαντζάκης Αυτός ο άγωνστος διάσημος, Αθήνα: Εκδόσεις Ι. Σίδερης.

ΦΙΛΙΠΠΙΔΗΣ, Σταμάτης (2017) *Έξι και ένα μελετήματα για τον Νίκο Κατζανζάκη*, Ηράκλειο: Βικελαία Δημοτική Βιβλιοθήκη.

JANIAUD-LUST, Colette (1970) *Nikos Kazantzaki sa vie, son oeuvre 1883-1957*, Paris: François Maspero.

福田耕佑 (2016) 「カザンザキスの思想とギリシアナショナリズムー彼の思想の根本と文学作品のライトモチーフとしての「叫び」の観点よりー」『エイコーンー東方キリスト教研究ー 』46: 102-128, 教文館.

（ふくだ　こうすけ　京都大学大学院文学研究科）